

北上「来月、前線に
行って来るねー」 ショ
タ「お土産は？」

くれ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

提督がお父さんのシヨタと、そのシヨタのお守りをする北上さんの、とある鎮守府でのお話です。

注意

シリアス寄り、長編、基本台本形式（台詞のみ）、オリジナル設定あり、です。

（また、この作品は途中まで同じハンドルネームでp i x i vにも投稿しましたが、こちらに移植しました。作者は同じです）

以上、よろしく願います。

イメージしやすいかと思ひ、雑ですが表紙も描いてみました。

目次

北上「来月、前線に行つてくるね」	
シヨタ「お土産は？」	1
北上「提督ー、ケツコンカツコカリしよー」	
提督「ん？」	23
北上「たぶんあたしは、2人目だから」	
シヨタ「えっ」	35
シヨタ「どうして前と制服違うの？」	
摩耶 鳥海「……」	53
北上「で、今練度はどれくらいなの？」	
摩耶「……」	69
シヨタ「そういえば、ウチの金剛つて強い の？」	
北上「んー？」	91

提督「フタフタマルマル、君達が司令室に
呼ばれた理由は分かるか？」

北上「来月、前線に行つてくるねー」 ショタ「お土産は？」

―ヒトサンサンマル 鎮守府廊下―

北上「そうねー。ショタつちは何が欲しい？」

ショタ「え、これから買いに行くの？ それとも作るの？」

北上「……あのねー」

北上「お土産つてのは普通、出先で買つてくるものなのさ」

北上「行く前に買つて渡すのは、お土産つて言わないわけよ」

ショタ「でも……」

摩耶「よく、ショタ」ガシツ

摩耶「元気してつか？」グリグリ

ショタ「ま、摩耶おねーちゃんつ。目が回るから、僕の頭を掴んで振り回すの止めて

よく」グワングワン

摩耶「固いこと言うなよー。アタシとショタの仲だろー」グリグリグリグリ

鳥海「摩耶、その辺で」

摩耶「へーい」パッ

ショタ「はあはあ・・・ありがとう、鳥海おねーちゃん」

鳥海「どういたしまして、ショタ君」ニコッ

鳥海「・・・」

鳥海「ところでショタ君」

鳥海「これ、貰ってくれませんか？」スッ

ショタ（ピンクの四角い箱）

ショタ（赤いリボンでラッピングされてる）

ショタ「これは？」

鳥海「これはですね・・・」

鳥海「ショタ君が大好きなネバネバ食品詰め合わせです」ニコッ

ショタ「好きじゃないよ。うわーん」ポイツ

鳥海「ああつ、投げちゃダメですよっ」

北上「……うわー」

摩耶「鳥海、その嘘アタシの頭グリグリよりエグいぞ」

シヨタ「……」ガクブルガクブル

北上「おー、よしよし」

北上（あたしの背中に隠れて、出てこなくなっちゃった）

北上（初めて納豆食べた時から、この子ネバネバの食べ物苦手になっちゃったのよ
ねー）

北上（まあ、まだ6歳だし。苦手な食べ物があるのは仕方ないかなー）

北上（……）

北上（果たしてこの子が納豆食べられるようになるのを、あたしが見られる日は来る
のかねー）ナゲナゲ

摩耶「あーあ、箱潰れちゃったじゃねーか」ヒヨイ

摩耶「まあ、中身は大丈夫だろ。ほら、鳥海」スツ

鳥海「ありがとう」

鳥海「……」

鳥海「シヨタ君」シャガミ

鳥海「中身がネバネバ食品って言うのは嘘なの」

鳥海「ショタ君が可愛いからついついからかっちゃったのよ。ごめなさい」ペコリ

鳥海「本当の中身は私と摩耶が作ったクッキーよ」

鳥海「鳳翔さんに教えてもらいながら作ったし、味見もしたから」

鳥海「よかつたら後で食べて？」

ショタ「……ほんと？」

摩耶「ああ、本当だよ。アタシ達が頑張って作ったんだ。食べないってことはないよな？」

ショタ「ありがとう、ふたりとも」

ショタ「あとでお父さんと一緒に食べるねっ」

北上「ねーねーあたしはー？」

ショタ「北上おねーちゃんも。あ、あと金剛も呼ぼうねっ」キラキラ

北上「そうねー。呼ぼうねー」

北上（ああ、なんていい顔）

北上（でもあたしは知っている）

北上（この満面の笑みは金剛その人ではなく、彼女がおやつタイムに出すショタつち用の高級グレープジュースに向けられているものなのだということに）

北上（哀れ金剛）

くく

金剛「atishoo（ハクシヨイツ）！」

金剛「Ah、コレはきつと今頃提督と提督ジュニアが私を巡って言い争いをしてい
ますネー」

金剛「なんて罪作りな女なんでシヨ．．．．」ズビズビ

くく

鳥海「喜んで貰えたようで良かったですね、摩耶」ヒソヒソ

摩耶「そうだな。慣れないことをした甲斐があつたつてもんだ」ヒソヒソ

鳥海「まあ、私はもう少し手の込んだ物を作つても良かったんですけど」ヒソヒソ

摩耶「．．．．ああ、そーだな」ヒソヒソ

摩耶（あの箱の中身ほとんどアタシの焼いたのだけだな。誰かさんがほとんど黒焦げ
にしたから）

北上「．．．．．」

北上「ところで、その背中の荷物」

摩耶「ああ、これかい？」

摩耶「そうそう、今から出発するんだよ。例の最前線に向けて」

鳥海「午前中に姉さん達をはじめとした鎮守府の皆さん、そして先程司令官さんに出

発の挨拶をしてきました」

鳥海「お二人で最後です」

北上「………そっかあ」

鳥海「北上さん」

鳥海「お世話になりました」ペコリ

摩耶「ショタと提督のことよろしくな」

摩耶「特に提督の方は………無愛想で誤解されやすいから」

摩耶「新しいのが来たら、フォローしてやってくれ」

北上「あー、うん。任せといてよ」

北上（とは言っても、来月にはあたしも二人と一緒に戦線に行くんだけどね）

北上（ここであえて口にする必要もないし。黙つとこ）

摩耶「おーし、ショタ。こっち来なっ」

ショタ「なに？」

摩耶「いいからいいから」

ショタ「うん」テトテト

摩耶「そりやっ」ギユ

ショタ「ぐむっ」

シヨタ「く、苦しいよお。摩耶おねーちゃん」ジタバタ

摩耶「へっへー、逃がさないぜー。シヨタあ」ムギユウー

シヨタ「んくくっ」

摩耶「・・・」

摩耶「なあ、シヨタ」

摩耶「アタシの身体、ちゃんとあつたかいか？」

摩耶「アタシの心臓の音、ちゃんと聞こえてるか？」

シヨタ「どうしたの急に？」

シヨタ「・・・」

シヨタ「うん、あつたかいよ」

シヨタ「心臓の音もドクンドクンって。とつても早くて大きいよ」

摩耶「そっか、良かった」

摩耶「・・・アタシ、生きてる」

摩耶「まだ、生きてるんだよな。アタシ」

鳥海「そうよ、摩耶」ギユ

鳥海「摩耶もシヨタ君も、私だって生きてる」

鳥海「生きてるから、こうやって抱きしめ合えるんだよ」

ショタ（鳥海おねーちゃんも背中に）

摩耶「・・・・・・・・・・」

鳥海「・・・・・・・・・・」

ショタ「・・・・・・・・・・」

ショタ（どうしよう、動けない）

北上「いいねえ、その天性の女つたらしぶり、しびれるねえ」

北上「この歳から美人ふたりをはべらすなんて、将来は大佐か元帥様かねー」

北上「偉くなったらあたしを養ってね、ありがとね」

ショタ「そんなじゃないよっ！」

ショタ「いいから、助けてよお」

鳥海「あら、私はショタ君の女になるのも満更じゃないわよ」 チュツ

ショタ「なっ／＼／」 カア

ショタ（鳥海おねーちゃん、今僕のほっぺにチューって）

摩耶「おっと、じゃあアタシも唾つけとこ」 チュツ

ショタ（摩耶おねーちゃんまでっ）

ショタ（本当にふたりともどうしちやっただろ・・・・・・・・）

北上「はいはい、そこまでー」

北上「そろそろ出発しないと、日が暮れるまでに中継地点の泊地に着かないよー」

摩耶「それもそうだな。他の鎮守府の艦娘と合流しなきゃだし」パツ

鳥海「遅れるわけにもいきませんからね」パツ

シヨタ「ぷはっ」

シヨタ（助かった、ようやく解放された）スーハー

摩耶「じゃあ、シヨタ」

鳥海「北上さん」

摩耶「鳥海」「いってきます」

摩耶「アタシ達の『お土産』」

鳥海「楽しんで食べてくださいね」

シヨタ「行ってらっしゃーい」フリフリ

北上「頑張つてねー」フリフリ

シヨタ「……………」フリフリ

北上「……………」フリフリ

シヨタ「……………」

北上「……………」

シヨタ「……………」行っちゃったね」

北上「そうねー」

ショタ「……………」

ショタ「ふたりとも、なんかちよつと変だったね」

ショタ「それにギユツとされたとき、震えてた」

北上「まー、しょうがないんじゃない？」

北上「これから行くのは深海棲艦との戦いの最前線」

北上「敵も flag ship 級ばかりらしいし、この辺りでは見かけない最新の航空機や装備なんかもあるだろうし」

北上「さつきまで話をした艦隊の仲間が、次の瞬間轟沈してる、なんてことも珍しくないって」

北上「おまけに、物資の補給も不定期。豪雨じゃない方のゲリラもしょっちゅう」

北上「あー、怖い怖い」

ショタ「でも、おねーちゃん達なら、きつと大丈夫だよっ」

北上「んー、どうしてー？」

ショタ「だって、摩耶おねーちゃんは、演習で飛んでくる艦載機をいっぱい打ち落としてたし」

ショタ「鳥海おねーちゃんは、夜戦で光って、バンバン砲撃を当ててカッコいいんだ」

シヨタ「それに知ってるでしょ？」

シヨタ「数週間後にはみんな、元気に帰ってきてるって！」ニコ

シヨタ「ウチの鎮守府の艦娘は強いから、絶対絶対無事に帰ってくるんだ！」

北上「……………そうねー」

北上「その通りだね、シヨタっち」

北上「そんなしびれる発言が出来るなんて、いつの間に男を磨いてたのさー」

北上「勝手に成長しないでよ、寂しいじゃんかー」ウリウリ

シヨタ「ちよつと、お姉ちゃんまで止めてよ」

北上「つれないなあ」スツ

シヨタ「じゃあ僕、金剛探してくるね」

シヨタ「おねーちゃんはお父さんを探してきて。一緒に摩耶おねーちゃんと、鳥海

おねーちゃんのお土産を食べ……………ああつ」

北上「んー、どしたのー？」

シヨタ「ほら、お土産。ふたりとも行く前にくれたよ。前に行ったおねーちゃんたち

も同じだった」

シヨタ「やっぱり僕の言った通り。お土産は出かける前に渡すものなんだよ、分かっ

た」フフン

北上「あー、うん」

北上（この、「お土産」はこの鎮守府だけのものだと思うんだけど・・・）

北上「そうだね、ショタっちの言うとおりだねー。あたしが間違ってたよ」ナデナデ

ショタ「えへへ、もつと褒めて褒めてー」

北上「よーしよしよし」ナデナデ

北上（欲望に素直だなあ）

ショタ「じゃあ、改めて金剛探してくるねっ」

北上「うん、急ぎすぎて転ばないでねー」

ショタ「うんっ」ピュー

北上「元気だなあ」

北上「・・・」

北上「で、何か用？」

提督「・・・気付いてたのか」

北上「まね。このハイパー北上さまが、何年一緒にいると思ってるのさ」

提督「・・・」

提督「摩耶と鳥海はもう行ったか」

北上「うん」

北上「ねえ」

北上「司令室でふたりになんて声をかけたの？」

提督「いつも通り声を掛けたさ」

提督「作戦と海域の説明をした後」

提督「『暁の水平線に勝利を刻め』と」

北上「……はあ」

北上「変わらないねえ」

北上「せめて一言くらい、本心を伝えてもいいんじゃないの？」

提督「勝て、というのが私の本心だ」

提督「それに、変わるつもりもない」

提督「そういう人間だということは、会ったその日に分かっていたはずだが？」

北上「そうだねー」ゴソゴソ

北上「そうだったねー」ペリペリ

北上「……うまうま」チュポ

提督「上官と喋っている最中に、口に食べ物を含む、か」

提督「随分と偉いご身分じゃないか。北上」

北上「ふかしてもいいなら、そうするんだけどねー」タバコを指に挟むジエスチャー

提督「この鎮守府は全面禁煙だ」

北上「知ってるよー。提督がこの鎮守府を引き継いで初めてしたのが禁煙宣言だったよねー」

北上「それまでは特にお咎めなしだったのに。世知辛いよねー」

北上「前提督と一緒に一服したあの時間は、思えば何気にわびさびだったよねー」

北上「あ、そだ」

北上「食べる？ さくらんぼ味だけど」

提督「遠慮しておく」

提督「甘いものは、あまり好きではなくてね」

提督「それでは失礼する。今日中にこなさなければならぬ業務がまだ残っているの
でね」スタスタ

北上「じゃあせめて、おやつ時間はショタっちと一緒に過ごしてあげてよ」

北上「さつきふたりから貰ったクッキー、ショタっちと一緒に食べたいってさ」

提督「……」ピタッ

提督「今日は終業まで司令室にいる」

提督「扉も開けておこう」スタスタスタスタ

北上「……」

北上「……今更甘党つてことも隠す必要のないに」ヤレヤレ

北上（禁煙の理由が、嫌いな父親がタバコを吸つてたからつてこと）

北上（そして当時生まれただけの、息子のシヨタつちの健康を害するからつてこと）

北上「前半だけだったら、隠れて吸つてやったんだけどなあ」ヤレヤレ

／＼ワー、キヤー／

北上「ん？ 外が騒がしい」チラッ

『今度は暁の出番ね。レディーとして務めさせていただくわっ』

『はわわっ、ピンクは電がやりたいのです』

『なら、私は暁と電のお母さん役ね。響は飼犬のハラシヨ、いい？』

『……ハラシヨ』

北上「駆逐艦？ ああ、ウザい」

北上（けど、見てる分には微笑ましいかな、たぶん。わかんないけど）

北上「さてさて、そろそろシヨタつちが金剛を捕まえるころだろうし」

北上「北上さまも、司令室に向かいますか」トコトコ

ーヒトゴーマルマル 司令室ー

北上「重雷装巡洋艦、北上！ 入りまーす」ガチャリ

シヨタ「あつ、おねーちゃん来た」

！
金剛「Oh、北上！ Well come！ よく来たネー！ さあ、こっちにドーゾ

北上「それでは、失礼おぼ」

北上「しかし、いつ見ても金剛のティーセットは豪華だよねー」

北上「……」 チラッ

提督「……」

北上「……よしよし、ちゃんといるねー」 ニヤリ

ショタ「どうしたの？ 座らないの？」

北上「ああ、うん。失礼しまーす」

金剛「北上ー、紅茶は sugar ナシでいいですかー？」

北上「おねがーい」

金剛「提督ジュニアはグレープジュースですネー」

ショタ「うんっ、お願い」 キラキラ

提督「……」

提督「金剛、私には聞かないのか？」

金剛「ノン、提督のことは聞かなくても分かりマース」

金剛「sweetなお菓子の時は、sugarなし、ですよネー？」

提督「……」

北上「おお、いいねー。以心伝心ってやつ？ 妬けるねー」

北上「どうよー、提督。浮気相手に見目麗しい帰国子女の艦娘は」ニヤニヤ

提督「やめてくれ、私は既婚者」

提督「そして結婚相手は一般女性だ」

提督「それに、いくら見た目が若いとはいえ、この金剛は前提督が着任当初建造した艦娘で、私よりも年上d金剛「提督？」」

金剛「Ladyの年齢を話題にするのは、あまりにdelicacyに欠ける行為だ
と思うネー」ニコニコ

提督「……つゾクッ

提督「す、すまない。浅慮だった」

金剛「分かれば良いんデース」

金剛「提督はお利口さんネー」ナデナデ

提督「金剛っ、私は君の上官で……」

金剛「それはそれデース。今はBreak time、家族の団欒に上官もへつたく
れもないネー」ナデナデ

シヨタ「お父さんと金剛って、仲良いよね。お姉ちゃん」

北上「そうねー、金剛が建造されてからすぐに提督が生まれたらしいからねー」

北上「感覚的には姉弟みたいなもんなんですよ、ほほえまー」

北上「まあ、フツー男女逆だと思っただけどねー、この光景」

金剛「Hi！それじゃあ皆さん、自分のdrinkはありますネ。提督ジュニア、このお皿にクッキーをお願いしマース」

ショタ「うん」カラカラ

北上「所々焦げて、形も歪。でも……」

金剛「Wow！これはとてもおいしそうデース！まごころを感じるネー！」

提督「ミントも混ぜ込んであるのか。香りもいい」

金剛「my sisterたちにも食べさせてあげたけど……数が少ないので今回はsorryネ」

ショタ「ねえねえ、早く食べよ！」

北上「んと、数は」

北上「ひい、ふう、みい……19枚か」

提督「……19枚」

金剛「……nineteenth」

北上 提督 金剛「……」

シヨタ「？」

シヨタ「どうしたの？早く食べようよっ」

シヨタ「でも、4人じゃちょうど分けられないから、一枚ずつ配って、4枚より少なくなったら、残りは一番子供の僕が貰ってもいいよね？」

北上 提督 金剛「シヨタたち（シヨタ、提督ジュニア）は4枚ね（な、デース）」

シヨタ「なんでさっ!？」ガビーン

北上「いやいや、どうして人にあげるクッキーの枚数をわざわざ素数にする必要があるのさ。嫌がらせ？」

提督「せめてあと1枚食べておくべきだったな」

金剛「ひとりで1枚も食べるなんて、とんだいやしんぼデース」

北上「ほんと、誰に似たんだろうねー」チラッ

提督「どうしてそこで私を見る？ 北上」

シヨタ「ぼつ、僕は1枚も食べてないよつ。食べたのは1枚だけ……あつ」

金剛「誘導尋問に引っかけられましたネ、提督ジュニアー」ニヤニヤ

北上「分かりやすいし、引っかけやすい。ほんと、誰に似たんだろうねー」

提督「だからそこで俺……私を見るな、北上」

ショタ「ううっ」

ショタ「だって、待ちきれなかったんだもん」ウルウル

ショタ「ごめんなさい。誤魔化そうとして」

北上 提督 金剛「……」

北上「まあ、食べちゃったのは仕方ないし。ショタっただけは4枚ね」テキパキ

北上「……で」

北上「はい、あたしの分、一枚ショタっちにあげるね」ヒョイ

金剛「私のもあげますヨ」ヒョイ

提督「まあ、私もこんなにならないしな」ヒョイ

ショタ「みんな」

ショタ「ありがとう」ゴシゴシ

金剛「ソーソー、日本男児はEasyに女性へ涙を見せちゃNoなんだからネー」

北上「じゃあ一段落ついたところで」

提督「そうだな、では」

「「いただきます」」サクッ

北上「んー」

金剛「Oh—これは……」

提督「何というか」

シヨタ「うん、なんか不思議な味だよね」

シヨタ「甘いけど、ちよつとしよっぱいんだ。何でだろ」

北上「……そーね」

北上「無塩バターじゃなくて、普通のバターを使つちやつたとかじゃないかな？」

シヨタ「えつ、普通のバターじゃ、クッキー作れないの？」

北上「そりや、作れなくはないけどさ」

北上「普通のバターは塩分が多いから、クッキーがこんな風にしよっぱくなつちやう

らしいよ？」

北上「ねつ、提督」

提督「……さあな」

提督「金剛」

金剛「？ なんですすカー？」

提督「角砂糖を貰えるだろうか」

提督「私には少しこのクッキーは塩辛くてね」

金剛「Yes、今入れるヨ。1個でイイ？」

提督「……2個たのむ」

北上（提督はクツキーを口に運びながら、振り返って窓の外を眺めていた）

北上（だからそんな提督がどんな顔をしているのか、あたし達からは見えなかつたけど）

北上（提督の肩越しに見える、雲ひとつない空はあまりにも眩しくて）

北上「……」サク

北上（彼女達の置いていったお土産の二口目は）

北上（一口目よりもずっと、しょっぱく感じた）

北上「提督ー、ケツコンカツコカリしよー」提督「ん？」につづく

北上「提督ー、ケツコンカツコカリしよー」提督「ん？」

ーヒトロクマルマル 司令室ー

提督「すまない、聞き間違いをしてみましたかもしれない」

提督「もう一度言ってくれないか？」

北上「いんや、たぶん聞き間違いじゃないよ」

北上「指輪ちよーだい」スツ

提督「……」

提督（いつもの様に金剛たちとお茶会をした直後）

提督（私は北上から、ふたりで話があると切り出された）

提督（それだけでも滅多にないことなので、驚いていたのだが……）

提督（まさか、その話題を北上の方からふれてくるとはな）

北上「ダメー？」クビカシゲ

提督「……駄目も何も」

北上「イイじゃん、イイじゃん。いっぱい持つてるんでしょー？カツコカリの指輪」

北上「腐らせとくくらいなら、あたしにちよーだよー」

北上「練度99なの、今はこの鎮守府にあたしだけなんだしさー」

北上「あ、でももうひとりいるか」

北上（まあ、でもあの子は提督とはカッコカリできないからなー）

北上「とにかく、ほらほら」

提督「……分かった」ゴソゴソ

提督「受け取れ、北上」スッ

北上「おお、ありがとー」

北上「じゃあ、はめてよ提督」

提督「ああ」

提督（私は小箱から指輪を取り出し、北上の薬指にはめた）

提督「北上」

北上「ああ、うん。ええっと」

北上「『まあ、なんてーの？そうねえ……いい感じじゃん？ 最近。まあ、な

んかそう思うんだよね。うん。……まあ、そんな感じ？』、だつたっけ？」

提督（北上がその台詞を口にする、薬指におさまった指輪は一瞬柔らかく光り、そ

してまた、鈍い輝きを取り戻した）

提督（提督の私が練度99に達した艦娘に指輪をはめ）

提督（艦娘が、それぞれに定められた台詞を口にする）

提督（それで、ケツコンカツコカリの儀式は終わりだ）

提督「どうだ？」

北上「うーん、別に身体が変わったところはないかなー」

北上「まあでも、隠れてた自分の伸びしろが見つかつたみたいな」

北上「頑張れば、もうちよつと強くなれる気がしてきたような」

北上「そうでないような？」スツ

提督「もう外すのか？ 指輪」

北上「まあね、指にはめてなくても身に着けとけば効果はあるし」ジャラジャラ

提督「……… ネットクレスか？」

北上「そつ、こうやって指輪に通して、首からかけておけば」

北上「服の中に入れられて、目につかないでしょ？」スツ

北上「ねっ」

提督「………」

北上「じゃー、練度の最大値も伸びたことだし」クルツ

北上「ちよいと、帰国子女の高速戦艦様にも演習を申し込んで来るとしますかねー」

トコトコ

提督「まで、北上」

北上「んー」ピタッ

北上「なに、提督」

提督「どうして今さら、そんなものを欲しがった？」

北上「どうしてってさー、朴念仁にもほどがあるよ？ 提督ー」

北上「もちろん提督のことを愛してるからデース（金剛のモノマネ）」

北上「女の子に言わせんなよ、このこのー」

提督「北上」

提督「私がケツコンカツコカカリの制度を、ただの戦力増強の手段としているのを、君が知らないわけがないだろう」

提督「練度が上限に達した者には、即座にその指輪を渡してきた」

提督「私に好意がないものでも、鎮守府の戦力アップに繋がるならと受け取ってくれた」

提督「私がこの鎮守府に着任してから、やむを得ない理由なしに、カツコカリを受け入れなかったのは」

提督「君だけだ、北上」

提督「なのに、どうして」

北上「・・・・・・・・これでもあたしは、さ」

北上「気を遣つてあげてたわけさ」

北上「あたしが指輪をしてたら、嫌でも考えちやうと思つて」

提督「誰のことをだ？」

北上「ほーら、そういう返しをしてる時点で、察しがついてるくせに」

北上「まあ、それでもあたしの口からどうしても聞きたいっていうなら、そうするけ

ど？」

提督「・・・・・・・・もういい、さがれ」

北上「はーい」ガチャ

北上「・・・・・・・・」

北上「・・・・・・・・提督」

北上「こんなこと言う和不謹慎かもしれないけどさ」

北上「正直あたしは人間側が勝とうが、深海棲艦側が勝とうが」

北上「どっちでもいいのさ」

北上「どちらにせよ、決着がつく頃には」

北上「あたしはきつと、いないだろうから」

北上「でもさ」

北上「こんなんでもさ、守りたいと思えるくらいには、大切にしているものもあるわけ
さ」

北上「……摩耶や鳥海、先に前線に行ったみんなからも頼まれたしね」ボソツ

北上「だからさ、あと一ヶ月、悪あがきしてみようかなって」

北上「まあ、戦いの中で死にたくないってのが一番なんだけどねー。痛いのはヤだし」

北上「回避値あげようにも、上限にはとづくに到達してたからねー」

北上「死ぬなら寿命でポツクリ死にたいよねー」ケラケラ

北上「んじや、ありがとね。提督」キィー

北上「……愛してるよ」パタン

提督「……………」

提督「……………」

提督「……………北上、私は」

提督「俺は、お前にそんな言葉をかけてもらえる権利なんてない」

提督（あの人の面影を重ねるばかりで）

提督（彼女自身を見ようとしなかった俺には）カチャ

ロケツトペンダント「キラッ

ーヒトロクマルゴー 鎮守府廊下ー

シヨタ「北上おねーちゃん、お父さんのお話終わったー？」

北上「おー、シヨタっち」

北上「うんうん、終わったよー」

シヨタ「じゃー、何して遊ぶー？」

北上「おいおい、シヨタっち」

北上「一応これでもね、勤務中なんだよあたし」ハアー

北上「色々しなきゃいけないことがあるわけですよ」

北上「いつまでもお子ちゃまと遊んでるヒマはないの」

北上「飴ちゃんあげるから、お勉強でもしておきなさい」ヒョイ

シヨタ「飴はもう」パクッ

シヨタ「で、北上おねーちゃんとも遊ぶー」ギユッ

北上（強欲だねえ）

シヨタ「ねーねー、いいでしょー」

シヨタ「遊んでよー。北上おねーちゃん」グイグイ

北上「他の艦娘に遊んでもらいなよ、駆逐艦とか」

シヨタ「全員遠征とか行ってるから、いないだもんっ」

北上「金剛は？」

シヨタ「金剛は『今から遠征艦隊が帰港するのデ、出迎えに行つてきマース。みんな Sexy な姿になつてるから、提督ジュニア

は着いてきちやノーなんだからネ！』って、どこかにいつちやった」

北上「ああ、そうねー」

北上「そういえば、そろそろ前線への物資輸送を終えた艦隊が戻ってくる頃ねー」

北上「確かにシヨタたちには、見せられないわ」

北上「色々と〃刺激が強すぎて」

シヨタ「遊んで、遊んで、遊んでよー」

北上「ああ、もう分かったよ。ウザいなあ」

北上「本当は今日から演習とか組みたかったけど、明日からにしますかねー」

北上「あーホント、あたしって甘いなー」

北上「子供にも、自分にも」

北上「そんならわり今日だけよ？ 明日からはちゃんと勉強だからね」

北上「お父さんみたいな提督になりたいんでしょ？」

シヨタ「うんっ」

シヨタ「お父さんみたいな、凄くて優しい提督になるっ」

北上（凄くて優しい、か）

北上（提督が聞いたらどんな顔するんだろ）

北上「で、どうするー？ なにするー？」

シヨタ「んーとね」

シヨタ「オママゴト！」

北上「うーんそれは、なんていうか」

北上「そのチョイスは男の子としてどうなの？」

北上（それに、ちよつと意味あげよねー）

シヨタ「え、でも暁型とか、睦月型のおねーちゃんたちとは、よくオママゴトするよ

？」クビカシゲ

北上「あー、なる」

北上（まあ、周りに女の子しかいなかったら、そうなるわよねー）

北上「おつけー、オママゴトね」

北上「じゃあ、あたしは何役をやればいいー？」

シヨタ「じゃあ、僕は息子役やるから」

シヨタ「おねーちゃんは、お義母さん役をお願い」

北上「ほいほーい、お義母さん役ねー、了解」

北上「……ん？」

シヨタ「じゃあ、いくよー……『ねえ、お義母さん。僕ね、変なんだ。お義母さんが、僕の新しいお母さんになってから、なんだかムズムズす』北上「はい、アウトー」

北上「シヨタつち、これから艦娘とオママゴトするの禁止ね」

シヨタ「ええっ!?　なんで！」

北上「情操教育上、悪影響しかないから」

シヨタ「じよーそーきよーいく？」

北上（誰かな、こんな昼ドラみたいな設定をオママゴトに盛り込んだエロスの申し子は？　秋雲大先生かな？）

北上「……コホン」

北上「とにかく、オママゴト以外のでよろしくー」

シヨタ「うーん、オママゴト以外かあ〜」ムムム

北上（悩んでる悩んでる）

北上（難しい顔してるシヨタっちも、なかなかオツだねー）ウンウン

北上「あ、そだ。シヨタっち」

シヨタ「うん？」

北上「午前中話したお土産の件なんだけどさあ」

北上「やっぱりあたしは、帰ってきてから渡すね」

北上「そんな代わり、お土産の中身には期待してていいよー」

北上「このハイパー北上様が、持ってきてあげるから」

北上「その時シヨタっちの一番望んでるものをさ」

シヨタ「……」

シヨタ「分かったっ」ニカッ

北上「ありがとよー、シヨタっち」ダキッ

北上（一瞬悩んで、すぐに笑顔をあたしに向けてくれたシヨタっち）

北上（小さいのに気を遣える、とってもいい子に育っただねー）

シヨタ「決めた！」

シヨタ「一緒にお昼寝しよっ、北上おねーちゃん」

北上「およ？ お昼寝？」

北上「遊ばなくていいのー？」

シヨタ「うん、なんか眠くなっちゃった……」メヲコスリ

北上「おっけー、じゃあ仮眠室でお布団敷いて、一緒にお昼寝しよっか」ギユツ
シヨタ「うんっ！」ギユツ

北上（掌から伝わる、小さくて暖かな手の形）

北上（それを守るため、忘れないためにあたしは……）

―球磨型 3 番艦 重雷装巡洋艦 北上 抜錨まであと30日―

北上「たぶんあたしは、2人目だから」シヨタ「えっ」につづく

北上「たぶんあたしは、2人目だから」シヨタ「えっ」

―ヒトサンマルマル 鎮守府廊下―

北上「あたしが死んでも、代わりはいるもの」

シヨタ「そ、そんなことないよっ！」

シヨタ「北上おねーちゃんは、おねーちゃんだけだよっ」

シヨタ「だから死ぬなんて言わないでっ」ヒシッ

北上「あーいやー」

北上「今のはさー、なんて言うか」

北上「単にアニメの台詞を言ってみただけなんだよねー」ポリポリ

北上「知らない？ エ〇ア？」

シヨタ「〇ヴァ？」

北上「そう、エヴ〇」

北上「そうよねー、世代じゃないかー」

北上「新劇場版の方もねー、いつまで待てばって感じだしねー」

北上「ジエネレーシヨンギャップ、ジエネレーシヨンギャップと」

北上「まあ、平たく言うとな。男の子がロボットに乗って」

北上「怖ーい怪獣と戦う物語なんだよー」ガオー

シヨタ「ヘー」

シヨタ「カッコいいねー」

シヨタ「主人公の男の子ってどんな感じ？」

北上「ヘタレ」

シヨタ「えっ」

北上「で、ファザコンでマザコンで年上好きでツンデレ好きで無口好き」

北上「自分勝手に弱虫で泣き虫で、おまけに優柔不断、かな」

シヨタ「……それ、面白いの？」オズオズ

シヨタ「というか、戦えるの？」

北上「なんやかんやで、敵は全部倒す……のかな？ アレは」

北上「まあ、あたしは面白いと思っただけだね」

北上「主人公も好きだったよ」

北上「人間臭くって」

北上「あの世界での性格じゃなかったら、逆に勝てなかったかもねー」

北上（艦娘のあたしが、人間を語るのも可笑しい気もするけどね）

シヨタ「ヘー」ポケー

北上「あ、これ。全く理解できてないって顔だ」

??? 「やあ、子守り大変そうだね、手伝おうか？」

北上「ん」

シヨタ「まさか、おねーちゃん達は……」

ーヒトサンマルゴー 司令室ー

金剛「………続いで。今日の建造の結果ですケド」

金剛「鈴谷、那珂、足柄でシタ」

金剛「どうするネ? 提督」

提督「………」

提督「鈴谷をこの司令室に呼んでくれ」

提督「那珂、足柄は“解体”する」

金剛「カーンカーンカーン」

提督「何か言ったか？」

金剛「いいえ、何でもないデス」

金剛「じゃあいつものように、大本営にも連絡をとっておくネー」

提督「よろしく頼む」

提督「では金剛、次は……」

コンコンコン

金剛「Oh! ハーイ、誰ですカー?」

北上『球磨型 3番艦 重雷装巡洋艦 北上です』

北上『お客様をお連れいたしました。提督はいらっしゃいますでしょうか?』

提督(客?)「チラッ」

カレンダー「ワイやで」

提督(摩耶と鳥海を前線に送り出してから、約2週間……)

提督(そして我が鎮守府の北上にあるまじき、礼儀正しき)

提督(ということとは)

提督「入れ」

北上「失礼します」ガチャ

シヨタ「お父さーんっ」タツタツタツ ダキッ

シヨタ「ふたりが帰ってきたよー!」ニコニコ

??「失礼いたします」

摩耶「高雄型重巡洋艦3番艦 摩耶」

鳥海「同じく、高雄型重巡洋艦4番艦 鳥海」

摩耶「本日付けで、大本営の指揮下から」

鳥海「正式にこの鎮守府に配属になりました」

摩耶 鳥海「よろしくお願ひしますっ」「ビシッ

金剛「Oh! 摩耶に鳥海デース!」

金剛「Welcome! これからよろしくネー!」

提督「……………」

提督「兩名、遠路はるばるご苦労だった」

提督「ところで、ふたりだけでここまで?」

????「もちろん違うさ」

????「彼女たちは僕が引率してきたんだよ」

時雨「白露型駆逐艦2番艦 時雨」

時雨「まあ、僕の自己紹介はいらなとは思うけど、一応ね」

提督「久しぶりだな、時雨」

提督「変わりはないか?」

時雨「……………」

「あまりなれなれしくしないでくれなにか」

「この時雨は貴様ではなく、俺の艦娘なのだから」

提督「……その様子じゃ、お変わりないようで」

提督「安心しましたよ、大佐殿」フフツ

大佐「ふんっ」

大佐「ため口でいい」

大佐「貴様の敬語など、気色が悪い」

大佐「階級や能力の差こそあれ、同期には違いないのだからな」

提督「では、お言葉に甘えるところでしょう。大佐」

提督「元気そうで何よりだ」

提督（彼は私の士官学校時代の同期）

提督（かつては互いを認め合い、競い合った仲だが）

提督（鎮守府に配属されるやいなや彼は、数々の戦果を挙げ大佐に）

提督（そして現在、32歳というという若さにして、最前線の総指揮を任されている）

提督「……」チラツ

北上「……」コクリ

北上「さあ、シヨタっちー」

北上「これから、あの顔の怖ーいおじさんと性格の怖ーいおねーさんが提督と大事な話があるらしいからさ」

北上「終わるまでどこかで待ってよつか？」

大佐「……………」ギロツ

時雨「そんな顔してるから、あんなこと言われるんだよ。大佐」ヤレヤレ

時雨「でも、僕の説明についてはあとで訂正しておいて貰えると嬉しいかな」ニコニコツ

北上「ははは」

北上「善処しまーす」

北上（あんたもその笑顔もたいがいだよねー）

シヨタ「えー、折角ふたりが帰ってきたんだから、早くお祝いしようよー」

北上「無理言わないの」

北上「摩耶と鳥海のふたりはすぐ来ると思うから」

北上「それまではこのハイパー北上様が一緒に遊んであげる。ねっ」

シヨタ「えっ、本当っ!？」

シヨタ「分かった、行こっ！ 北上おねーちゃん」グイグイツ

シヨタ「お父さん、金剛、そしてふたりとも。またあとでねっ」バイバイツ

ガチャ バタンツ

提督「金剛」

提督「大佐と時雨を隣の応接室に」

提督「私もすぐに向かう」

金剛「はいネー」

金剛「それではおふたりとも、こちらにどうぞー」スタスタ

大佐「ああ」スタスタ

時雨「うん」スタスタ

提督「……………」

提督「摩耶、鳥海」

提督「事前に渡していた資料には一通り目を通したか？」

摩耶「おう」

鳥海「ええ」

提督「では、ひとまず資料を完璧に網羅してほしい」

提督「その残された情報のひとつでも、齟齬が生じないように頼む」

提督「それと、これからのスケジュールについてだが」

提督「この鎮守府にて数日間、艦隊演習を行ってもらった後」

提督 「とある海域への輸送任務を行ってもらうことになる」

提督 「初任務としては、少々荷が重いとは思うが」

提督 「ここに着任した艦娘たちが全員通ってきた道だ」

提督 「無事、達成してくれることを願っている」

提督 「以上だ」

摩耶 鳥海 「承知したぜ（いたしました）」

提督 「何か質問は？」

摩耶 鳥海 「ありません」

提督 「では、下がって休んでく」

『お父さーんっ』

『ふたりが帰ってきたよー！』

提督 「……………」

提督 「あー、最後に」

提督 「これは業務命令ではないんだが」 ポリポリ

提督 「私の息子は君達が来るのを心待ちにしているね」

提督 「疲れているところ申し訳ないが、すこし相手をしてくれると助かる」

摩耶 鳥海 「……………」キョトン

鳥海 「……………ふふ」

提督 「? なにかおかしいことをいったらどうか」

鳥海 「いえ、司令官さんはこういう人なんだなあ、と」

鳥海 「なるほどなあ、と思つてしまいました」

鳥海 「ねえ、摩耶?」

摩耶 「まあ、なんつーかさ」

摩耶 「そういう、優しさをもつと直接伝えてやれば」

摩耶 「シヨタのヤツも喜ぶんじゃないのか? 提督」

提督 「……………すまん」

提督 「そういうのは、勝手が分からなくてな」

鳥海 「難しく考える必要なんてありませんよ。司令官さん」

摩耶 「そーそー。あいつと一緒に遊んでやりやいいんだ」

摩耶 「あのくらのガキは、大人が笑つてりや、十分楽しいんだからさ」

提督 「そこなんだよ」

摩耶 「あん?」

提督「……その笑顔が、な」

提督「怖いんだとさ」

鳥海「怖い？」

提督「ああ」

提督「シヨタがまだ言葉も覚えていない頃だ」

提督「ベビーベッドで昼寝をしていたシヨタが目を覚ました」

提督「妻は料理中で手を離せず、仕方なく私があやすことにした」

提督「『いないないばー』とな」

提督「そして私が顔を覆っていた手を取った瞬間」

提督「失禁された」

摩耶「」

鳥海「」

鳥海「は？」

摩耶「し、失禁!?!」

提督「ああ、それはもう盛大にだ」

提督「おむつをしていたのにもかかわらず、ベッドの上は大洪水」

提督「あまりに静か過ぎるのを不審に思った妻がすぐにやってきて」

提督「その惨事に、私はこっぴどく叱られた」

提督「正直、父親からの説教や、元帥からの詰問よりも恐怖を感じた」

提督「それ以来人前では極力、真顔で笑わないように心掛け」

提督「シヨタにも怖がられないように、ある程度の距離を持って接する様になった」

提督「まあ、それ以上に、またシヨタを泣かせて、妻から怒られるのが怖かったからな」トオイメ

提督「そういうわけで私は、シヨタの世話を北上たちをお願いしているんだ」

提督「分かってくれたかな？」

摩耶 鳥海「」

提督（なんだ、この反応は？）

摩耶 鳥海「……っ」プルプルプル

摩耶「だーっ、はっはっはっ！」

摩耶「何百つていう艦娘の命を預かる提督がっ」

摩耶「息子ビビらせて、嫁さんに怒られるとか」

摩耶「だらしねーにもほどがあるだろ」ゲラゲラ

鳥海「ちよつと、摩耶。そんなに笑っては司令官さんがかわいさ……ぷっ」

鳥海「す、すみません。司令官さん」プルプル

提督「い、いや。気にするな」

摩耶「はっはっはっ……はあーあ」

摩耶「どれどれ、どれだけ怖いか見てやるよ、提督。鳥海」ミギホホツネリ

鳥海「しっ、失礼します。司令官さん」ヒダリホホツネリ

提督「……………」

提督「ほうは（どうだ）？」

摩耶 鳥海「……………っ!?!」

摩耶「確かにコレはこえくよっ」ゲラゲラ

鳥海「も、もう限界ですっ」プルプルプルプル
バンツ

大佐「おい！客を待たせてさつきから何を騒いでいるっ」

時雨「やれやれ、乱暴だな。大佐は」

金剛「Oh、ドアはもつとdelicateに扱ってください」オロオロ

時雨「その台詞を君の口から聞くのは、多少なり違和感を覚えるね」

提督「ほほ、ふまはい（ああ、すまない）」クルツ

大佐「」

時雨「」

金剛「」

大佐「なっ!？」

大佐「何だその顔はっ」ヒキツ

大佐「ええい、その顔をこつちに向けるなっ」シツシツ

提督「ほんにはへんにへふへも……（そんなに邪険にせずとも……）」

大佐「やかましい。気色が悪いにもほどがある」

大佐「赤子なら即座に泣き出すレベルだぞっ」

提督「」グサツ

摩耶（あ、今提督が傷ついた音が聞こえた）

鳥海（というか、大佐さんは良く司令官さんの言ったことを聞き取れましたね）

提督「ひぐへ、ひみははいひようふはよな?（時雨、君は大丈夫だよな?）」

時雨「……すまない、あまりこつちを見ないでくれるかな?」

時雨「夢に出てこられたりでもしたら、嫌だからね」ニコ

提督「」

提督「ほ、ほんh(こ、金g) 金剛「Oh! これがジャパニーズなまはげ! 中々の quality デース! 流石提督ネー」

提督「」

提督(この仕事、もう止めようかな・・・)

―ヒトサンサンマル 鎮守府廊下―

摩耶「はーあ、面白かった」メモトコスリ

鳥海「やり過ぎよ、摩耶」

鳥海「司令官さん、最後の方魂の抜けたもぬけの殻状態だったじゃない」

摩耶「鳥海だって終始ノリノリだったじゃないかよ」

シヨタ「あ、来た」

シヨタ「おーい、ふたりともー」ブンブン

鳥海「・・・摩耶」ボソツ

摩耶「・・・わーってるよ」ボソツ

摩耶「おー、シヨタ」

摩耶「改めて、たまだいまだぜ。元気してたか？」ナデナデ

シヨタ「うんつ、摩耶おねーちゃんもおかえりー」ギユツ

鳥海「シヨタ君、私には？」

シヨタ「鳥海おねーちゃんもおかえりなさい」ギョツ

鳥海「はい、ただいま。シヨタ君」ナデナデ

鳥海「私たちがいない間、さみしくありませんでしたか？」

シヨタ「ちよつと寂しかったけど」

シヨタ「お父さんも、北上おねーちゃんも、金剛もいたから」

シヨタ「あんまり寂しくなかったよ」

摩耶「おいおい、そこは寂しかったって言っておけよな」

シヨタ「えへへ」

鳥海（かわいい）

北上「……戻ってくるの遅いよ、ふたりとも」ボロツ

鳥海「あれ、どうしたんですか北上さん」

鳥海「お疲れのようですよ」

北上「いやね、まさしくその通りなんだよ」

北上「もうね、くたびれてます、あたし」

摩耶「そんなになるまでなにして遊んでやってたんだよ」

北上「……一発ギャグ縛りしりとり」ボソツ

摩耶 鳥海（なに、その地雷臭ぶんぶんの遊び……）

摩耶「しやーねーな。んじやこの摩耶様がひとはだ脱いでやるとしますかっ」
シヨタ「ほんとっ!？」

摩耶「ああ、本当だとも」

シヨタ「どうしようかなあ」ウーン

北上「……………いいの？ 疲れてるんじやない？ ふたりとも」

鳥海「お気遣いありがとうございます」

鳥海「でも今日は、大本営からこちらの鎮守府に移動してくるだけでしたら」

摩耶「シヨタが喜んでくれてるんだし、ちよつとはサービスしてやらないとな」

北上「ふーん」

シヨタ「あ」

摩耶「お、決まったか？」

摩耶（悩んでたわりには、あっさり決まったな）

シヨタ「ううん、そうじゃなくてね」

シヨタ「おねーちゃんたちに聞こうとしてたこと、たったいま思い出したんだ」

シヨタ「ねえ、摩耶おねーちゃん、鳥海おねーちゃん」

シヨタ「なんでお姉ちゃんたち、出かける前と制服が違うの？」

シヨタ「どうして前と制服違うの？」
摩耶
鳥海「……………」
につづく

シヨタ「どうして前と制服違うの？」 摩耶 鳥海

「・・・・・・・・」

―ヒトサンサンゴ― 鎮守府廊下―

シヨタ「えーとね、前どこかで聞いたんだけどね」

シヨタ「艦娘の制服って、それぞれに思い入れがあるから」

シヨタ「滅多に自分の制服のデザインを変えないんだって」

シヨタ「でも、ふたりとも前線から帰ってきたら制服が変わってるから」

シヨタ「どうしてだろうなーって」

シヨタ「ねえ、どーして？」

鳥海「ええつとね、シヨタ君」

摩耶「それはだな、その・・・・・・・・」

北上「あー、そつかあ」ポンッ

北上「シヨタつちは知らなかったんだったねー」ウンウン

北上「いい？ シヨタつち。艦娘はね」

北上「デジオンと同じなんだよ」ビシッ

ショタ「えっ」

摩耶「えっ」

鳥海「えっ」

ショタ「あれ、なんで摩耶おねーちゃん達まで驚いてるの？」

摩耶「ああ、いや。北上があまりにも当たり前前のことをいきなり言うからさ」アセア

セ

鳥海「ビックリしちゃったんだー」アセアセ

ショタ「ふーん」

摩耶「・・・・・・・・なに言ってるんだ、北上のやつ」ヒソヒソ

摩耶「そんな話、建造されてこのかた1度だつて聞いたことねーぞ」ヒソヒソ

鳥海「まあ、北上さんはこの鎮守府の古参だし」ヒソヒソ

鳥海「ショタ君の扱いにも慣れてるようだから、ひとまず任せてみましょう」ヒソ

ヒソ

北上「ショタたちは、デ○モン知ってるよね？」

ショタ「ナゲットのやつ？」

北上「そうそうー」

摩耶 鳥海（デ○モン認識の仕方がヒドい）

北上「ふたりはねー、前線に行く前は完全体だったんだよ」

北上「だから凄く強かったでしょー？」

シヨタ「うん」

北上「で、前線に行つて戦つて、活躍して」

北上「力を使い果たして、幼年期に戻っちゃったの」

北上「それで制服も完全体から、幼年期のものに戻っちゃったんだよ」

北上「わかった？」

シヨタ「へー」

シヨタ「そーなんだー」ポケー

北上「シヨタたちは理解が早くて助かるなー」ナデナデ

鳥海（理解したつていうよりは）

摩耶（理解するのを放棄したつて言った方が正しい気もするけどな）

摩耶（まあ、ひとまずこの話に乗つておこう）

摩耶「まっ、そーいうことだ。シヨタ」

摩耶「前よりちよつとばかし、弱くなつちまつたけどよ」

摩耶「すぐ練度を上げて、またカッケー摩耶様を拝ませてやつからよ」

摩耶「楽しみにしてな」ニカッ

北上「へー、言うじゃない」ポンッ

北上「あたしもさー、練度あげしてるところなんだよねー」

北上「今から訓練、いってみよつか?」ニカッ

摩耶「」

鳥海「じゃ、じゃあ私は失礼します」

北上「いやいや、みんなで作った方が、効率いいからさー」ガシッ

鳥海「」

北上「れつつごー」ズルズル

ショタ「ごー」

ー同ヒトサンサンゴー 応接室ー

金剛「提督の紅茶デース」コトッ

提督「ありがとう、金剛」

提督「さて、待たせてすまないな。大佐」ポスッ

大佐「まったくだ」

大佐「これ以上、俺の時間を奪ってくれるな」

大佐「わざわざ俺が前線を離れて、この寂れた鎮守府を訪れたのは」

大佐「練度の艦娘の護衛をするためではない」

大佐「ましてや」

大佐「貴様らのくだらん漫才を見にきたのでは断じてない」

提督「・・・・・・・・」

大佐「俺と貴様の仲だ。前置きは省こう」

大佐「用件は、この鎮守府からの前線支援についてだ」

提督「・・・・・・・・支援なら、十分しているだろ？」

提督「ここ2、3年の前線への物資支援は、燃料、弾薬、鋼材、そしてボーキサイト」

提督「大本営からの支援を除けば、どれをとっても我が鎮守府が一番の供給元のはずだ」

提督「それも供給は不定期ではなく」

提督「3日に1回は、前線に供給出来るように、輸送艦隊を送り出している」

提督「これでもまだ足りない？」

大佐「・・・・・・・・」

提督「まあ、前線が大変なものも分かる」

提督「心中、お察しするよ」

提督「予期せぬ事態に対して、常に気を張っていないといけない極限状態で」

提督「心配事はなるべく減らしておきたいのだろう」

提督「金剛」

金剛「ハイ、提督」

提督「前線への供給回数を増やす」

提督「それにあたり。追加で輸送に必要な装備を工廠で揃えてくれ」

金剛「Okネ。明日中には開発しておきm 提督「金剛」

提督「今すぐ、作ってきて欲しいんだ」

提督「明日の朝一、使うことになるからな」

金剛「・・・・・・・・Yes」

金剛「分かったヨー提督」スツ

金剛「じゃあ、行ってくるネー」ヒラヒラ

バタンツ

大佐「・・・・・・・・ふんっ」

大佐「時雨」

時雨「何かな？ 大佐」

大佐「あの金剛についていけ」

時雨「え？」

大佐「開発の手伝いをしてやれと言ったんだ」

大佐「この開発は、俺達にも関係することだからな」

大佐「前線への供給物資をすべて開発に使われでもしたらたまらん」

時雨「・・・・・・・・まあ、僕は」

時雨「大佐の命令なら、なんでも従うけれど」チラッ

提督「ああ」

提督「金剛と一緒になら、工廠に立ち入ってくれても別に構わない」

提督「戦艦では作りにくいものもあるからな、むしろ手伝ってくれた方が私は助かる」

大佐「だ、そうだ。時雨」

大佐「それと、時雨」

大佐「・・・・・・・・・・・・・・・・、・・・・・・・・、・・・・・・・・」ボソボソッ

時雨「！」

時雨「・・・・・・・・了解、出来る限りのことはやってみるよ」

時雨「それじゃ、行ってくる」スッ

バタン

大佐「・・・・・・・・」

大佐「・・・・・・・・いつまで経っても甘ちゃんなのは変わらない、か」

提督「何の話だ?」

大佐「いや、こっちの話だ」

大佐（艦娘に対して、いつまでも情を捨てきれない、脆弱な男）

大佐（そんな甘ちゃんの意図を分かっちゃ、自分自身の不甲斐なさのな）

―ヒトサンゴーマル 鎮守府廊下―

金剛「burning♪, burning♪, burning loooooove

♪」フンフフフ

時雨「待つてよ、金剛」

金剛「時雨? どうしたネー?」クビカシゲ

金剛「大佐に君の手伝いをしろと言われてね。勿論、君の提督にも許可はもらつてあ

る」

時雨「同行しても構わないだろうか」

金剛「Really? それはとーっても助かりマース!」ガシツ

時雨「・・・・・・・・っ」

金剛「Thank Youネ、時雨ーっ」ブンブン

時雨「……………」

時雨「わ、分かったから、僕の両手を解放してくれないかい？」

時雨「すごく痛いんだけど」

金剛「Oh! Sorry, Sorryネー。ついtensionが上がってしまい

ましター」パッ

時雨「いや、いいんだ。分かってくれれば」

時雨「じゃあ、工廠に急ごうか」

金剛「そうしましょー」

時雨「……………」スタスタ

金剛「……………」スタスタ ニコニコ

時雨「……………」スタスタ

金剛「……………」スタスタ ニコニコ

時雨「……………」

時雨「なんだい、さつきから」

金剛「いえ、時雨は優しいなーと思ってネー」

時雨「優しい？」

時雨「僕が?」

金剛「Yes。だつてさつき、無理矢理手を解こうとせずに」

金剛「一言声をかけてくれたでしょ? 私を傷つけない為に」

金剛「嫌なら振りほどいてくれても良かったんですヨ?」

時雨「別に、そう言うつもりじゃなかったんだけどね」

時雨「・・・・・・・・」スツ(背中に腕を隠す)

時雨(単に出来なかつたのさ。両手が痺れてね)

時雨(今でもまだ、痺れたままだけれど)ビリビリ

時雨(それに・・・・・・・・)

『金剛「Really? それはとーつても助かりマース!」ガシツ 時雨「……………」』

時雨(手を掴まれるまで、反応出来なかつた)

時雨(常に戦いの前線で、感覚を研ぎ澄ませている僕が)

時雨(手を掴まれて初めて、そのことに気が付いて)

時雨(そして気が付いてもなお、その握力に僕は為す術がなかつた)

金剛「~~~~~♪」フンフフフフーン

時雨「ねえ、金剛」

時雨「君は昔、〃鬼神〃って呼ばれてたんだよね」

金剛「What? キシン?」ウーン

金剛「キシン、きしん……Oh! “鬼神”、もしかして、Demonのとですかー?!」

金剛「No Way! こんなprettyな艦娘を捕まえて、Demonだなんてあんまりデース!」ヨヨヨ

金剛「ああ、そうデース。Rememberしまシタ」ハッ

金剛「Princess! 姫と書いて“姫神”となら、呼ばれていたかもしかまセーン」ウンウン

金剛「Hey、時雨——! 私のことはこれからプリンセスと呼んでくれてもいいんですヨー?」

時雨「……」

時雨「そうか、分かったよ」

時雨「プリンセス」ニコッ

金剛「はうっ／＼」ピクッ

時雨「どうしたのプリンセス?」

時雨「顔が真っ赤だよプリンセス」

金剛「Stop! ストップ、時雨っ!」

金剛「Let's forget! 私が悪かったデース! 忘れてくだサーイ／＼

／＼」パタパタ

時雨「うーん、そうだな」

時雨「じゃあ勝負をして、金剛が僕に勝ったら」

時雨「さっきのは忘れてあげる」

金剛「Thank You! 時雨、感謝デース!」

時雨「決まりだね」ニコツ

時雨「じゃあ、工場に行こうか」

時雨「早く開発を終わらせないと、勝負の時間がなくなってしまうからね」

金剛「Umm? 開発結果で勝負するんじゃないんですカー?」クビカシゲ

時雨「まさか」

時雨「勝負といったら勝負、"Fight"に決まってるだろ?」

金剛「時雨、それは……………」

時雨「大丈夫だよ、本気でやりあおうって言うてる分けじゃない。僕が言ってるのは
演習さ」

時雨「ただの戦闘練習。もちろん先輩として、胸を貸してくれるよね?」

時雨「もしかして、駆逐艦の僕を気遣ってくれてるのかい?」

時雨「優しいね、金剛は。やっぱり上司が優しいと、その艦娘もいい子なんだね」

時雨「英国ではそんな人をなんて言うんだったかな・・・そうだ」

時雨「Spoiledだったっけ？ それともWussの方が合ってるかな？」

時雨「ねえ、金剛、棄権でもいいけどさ。それなら君の提督のあだ名、どっちがいいか選んでよ」ニコニコ

金剛「・・・・・・・・」

金剛「・・・・・・・・ good grief (やれやれ)」フウ

金剛「LadyがそんなDirtyな言葉を使うものじゃないネー」

金剛「OK。演習でも何でも付き合います」

金剛「開発、早く済ませてしまいましょー」

時雨「ありがとう、金剛」ニコツ

時雨「あ」

時雨「勿論、加減はしなくてもいいからね」

時雨「僕は駆逐艦だから、ひよつとしたら、手加減してくれようと考えてるかもしれないけど」

時雨「僕は前線を支える現役の艦娘で」

時雨「金剛は戦艦とはいえ、何年も戦闘から離れてる、もはや秘書艦にして雑用をさせるしか使えない、置物同然のロートルなんだからさ」

時雨「ちよーしこかずに、全力で来てね」

時雨「片手でぶっ潰してあげるからさっ♪」エヘッ

金剛「・・・・・・・・」

金剛「イヤー、時雨は凄いネー」

金剛「難しい日本語もいっぱい知ってるし、英語もとっても詳しいネー」

金剛「きつと大佐サンの教育が行き来届いてるんですネー」ウンウン

金剛「私、とつてもとつてもRespectデース」パチパチ

金剛「私たちの鎮守府では、あまり勉強をさせてあげれてないので」

金剛「前線指揮で忙しいのに、そうやって時雨たちをかまっておられる大佐サンは」

金剛「1度にひとつのことしか出来ない、私たちの提督とは違いますネ」

金剛「そんな大佐サンみたいに、女性からRespectされる男性を英語ではです
ネ・・・・・・・・」

金剛「親愛を込めて、Tomcat」と呼んでマース!

金剛「だからネ、時雨」

金剛「私がWinnerになったときは、大佐サンのことをこれから一生、トムって呼んでもらいマース！」

金剛「私との約束だよ。破っちゃやノーなんだからネ！」ニコツ

時雨「・・・」ゾクツ

時雨「ああ、約束するよ」ゴクリ

時雨（物腰は柔らかいままなのに、一瞬背中に奔った悪寒）

時雨（これが『鬼神の金剛』）

時雨（かつて対抗演習で数多の大和型や外国戦艦を圧倒し）

時雨（数々の大規模作戦で、MVPを欲しいままにしてきた艦娘）

時雨（カッコカリ制度が出来た時期を境に、前線から離れ）

時雨（その名声は次第に薄れていったけれど）

時雨（さっきの彼女の背中に、僕は鬼を見た）

時雨（その気迫は本物だ。ちっとも衰えを感じない）

時雨（彼女を相手にするくらいなら、前線で戦艦flagship級とサシで対峙方

がまだ気楽

ってものだ)

『大佐「たきつけて相手をして貰えいい経験になる、とはいえ、別に勝ってもかまわんぞ?」ボソボソツ』

時雨(・・・・・・・・でも)

時雨「僕は勝つよ。大佐」ボソツ

時雨(彼女に勝てないようじゃ、僕は僕の願いを果たせない)

時雨(この薬指の指輪に誓ったんだ)ギユツ

時雨(いつか、大佐の止まない雨を止めるって)

北上「で、今練度はどれくらいなの?」 摩耶「・・・・・・・・」につづく

北上「で、今練度はどれくらいなの？」 摩耶「……」

—ヒトヨンマルマル 演習場—

北上「？」

シヨタ「50つてこと？」

摩耶「あゝゝゝゝゝ」グシヤグシヤ

摩耶「5だよっ！ 練度5なんだよっ！」

摩耶「しょうがねーだろっ!? 今日が進水日なんだよっ。アタシたちは」

摩耶「文句あつか」クワツ

シヨタ「ふえっ」ビクウツ

北上「うわー、子供にその開き直り方うわー」ドンビキ

鳥海「大人げないわよ。摩耶」ドンビキ

摩耶「るせー、このメガネ！」

鳥海「め、メガネって……」

北上「ボキヤブラリーも貧困だねー」

??? 「あらあら、今日は賑やかですね」

シヨタ「あ」

シヨタ「香取おねーさんだ」

シヨタ「こんにちはっ！」

香取「はい、こんにちはシヨタ君」ニコリ

北上「や、香取」

北上「今日もいつものように演習お願いしにきたよー」

香取「ええ、お待ちしております。本日も訓練、お付き合います」

香取「ところで」チラッ

香取「そちらのおふたりには、改めてご挨拶させていただきますよーか」

香取「香取型練習巡洋艦1番艦の香取です」

香取「日々、この鎮守府の艦娘の練度向上に尽力させていただきます」

香取「よろしくお願いしますね」ペコッ

摩耶「高雄型重巡洋艦3番艦、摩耶だ」

摩耶「よろしくな」

鳥海「同じく4番艦の鳥海です」

鳥海「よろしくお願ひします。香取さん」

シヨタ「知り合いなのに、そんな挨拶するなんて変なのー」

北上「まー、艦娘にも色々礼儀とかあるのよ」

北上「シヨタつちも、もう少し大人になれば分かるよ」

シヨタ「ふーん」

香取「それで本日はどうしましょうか？」

香取「練度の高くない艦娘もいることですし」

香取「無難に、砲撃演習でも実施いたしましょうか？」

北上「うーん……そだねまずは」

北上「新人ちゃんたちの歓迎会といきますか」ニイ

―同ヒトヨンマルマル 応接室―

大佐「さて、人払いも済んだところで改めて先程の話の続きといこう」

大佐「提督」

大佐「確かに貴様の鎮守府からの支援は大きい」

大佐「貴様からの支援がなければ、今の前線は保てていないだろう。それは認めよう」

大佐「だが、それは『物資支援』に限つての話だ」

大佐「俺は『艦隊支援』の増強を求めている」

大佐「舌ばかり回る貴様のために、言い逃れようがない、より直接的な物言いをしてやろうか？」

大佐「貴様の艦娘を俺（前線）によこせ」

提督「……………」

提督「『前線ノ戦力強化ノタメ、各鎮守府ハ毎年高練度ノ艦隊を複数、前線ニ投入サレタシ』」

大佐「そう。それが十数年前、俺達が鎮守府を任されるようになった直後に、通達された命令だ」

大佐「ひと艦隊6名を複数、つまり年間最低12隻以上の高練度の艦娘を前線に送り出さなければならない」

提督「だが、私は大本営の命令には背いていない」

提督「最低限の艦隊支援は、私の鎮守府も行っている」

大佐「だから、それでは足りないと言っているっ」ダンッ

大佐「高練度」と一言でいっていても、条件は艦種などでも異なる」

大佐「駆逐艦・軽巡洋艦なら練度50以上、重巡洋艦・軽空母なら練度40以上」

大佐「戦艦や空母なら、改まで改造してあれば、大本営は高練度として認めている」

大佐「また、艦隊支援の艦娘の練度や数、艦種類にに応じて、大本営から資金や資材が貰えることになっている」

大佐「大和型などは、練度1だろうとも、前線に送れば、それに見合うだけの額の援助が、その鎮守府に送られる」

大佐「援助目当てで、獲得した資材で戦艦レシピや大型建造をブン回すバカがいるくらいにはな」

大佐「なのに、貴様はどうだ？」

大佐「デイリー任務でしか建造しない」

大佐「練度が高い艦娘が多くとも、やらせることは演習と遠征ばかり」

大佐「それでは、宝の持ち腐れだ」

大佐「貴様には目の前の平穩しか見えていない」

大佐「貴様がやっていることは、綺麗なものだけを見ていたいという現実逃避だ」

大佐「手に届くものだけを守り抜こうとするただの自己満足だ」

大佐「確かに、貴様を送ってくる艦娘は、非常に練度は高い」

大佐「だが、代わりに圧倒的に数が少ない」

大佐「送ってくるのは毎年十数隻。大本営が定めた最低艦数ギリギリだ」

大佐「加えて艦種も、ほとんどが駆逐艦や軽巡洋艦、重巡洋艦」

大佐「しかももれなく全員、〃期限〃が近い」

大佐「これでどう、戦力として組み込めばいいというんだ？」

大佐「練度が高くても、主力の補佐としてしか扱えない」

大佐「連携を向上させようにも、その時間もない」

大佐「提督、この際はつきり聞いておく」

大佐「貴様は、この戦争に勝つ気があるのか？」

―ヒトヨンイチマル 演習場―

北上艦隊

旗艦 北上「んじゃーまー、ちよつちもんであげますかねー」

鳥海艦隊

旗艦 鳥海「私が旗艦で良かったの？ 摩耶」

摩耶「おう。今日のアタシは暴りたい気分なんでね。被弾すんなよ鳥海」

シヨタ「おねーちゃんたちガンバレー」

香取「……双方、準備が出来たようですね」

香取「それではこれより、北上艦隊対鳥海艦隊の対抗演習を行います」

香取「演習、始めてください」パンツ

《戦闘開始！》

北上「早速いくよー」バシユ

摩耶「おっしや、一発かますぜ！」ズザー

鳥海「摩耶っ、前に出すぎよ」

鳥海「ここは相手の出方をみて……」

摩耶「はんっ、そんなまどろっこしいことしてられるk」

バーンツ！ パラパラ

シヨタ「すごい水柱だねー」オオー

鳥海「!？」

摩耶「か、はっ」タイハツ！

鳥海「摩耶っ！」

摩耶「チーン

鳥海「砲撃っ!? どこからっ、一体いつの間につ」キョロキョロ

鳥海（いえ、砲撃であれまず音で気付くはず）

鳥海（それに、砲弾が近づいてくれば肉眼でわかる）

鳥海（着弾しても、その場所から攻撃方向を判断することも）

鳥海（なのにどちらも確認出来なかった）

鳥海（……………）

『北上「早速いくよー」バシユ』

『シヨタ「すごい水柱だねー」オオー』

鳥海「！」ハッ

鳥海（これは、まさか）

北上「そ」

北上「『開幕雷撃』、だよー」チャキ

鳥海「!？」クルッ

鳥海（いつの間に背後に）チャキ

北上「気づくのおっそーい」カチッ

鳥海「しまっっ」

ドカーンッ！

北上「ふー」

北上「いつちよあがりつと」ガサガサ ピラッ

北上「いやー、勝利の一本はいいねー、痺れるねー」チュパチュパ

北上（棒キャンディーうまうまー）

香取「……………」

香取（これは……………ほほう？なるほど）

香取（随分と鍛え甲斐がありそうですね）フフッ

香取「そこまで！」

《戦闘終了！》

シヨタ「北上おねーちゃんすごーいつ」キラキラ

北上艦隊 S勝利

旗艦 北上「いや、楽勝だったわー。これが重雷装艦の実力つてやつよー」キラキラ

無傷 MVP

シヨタ「おめでと北上おねーちゃん飴ちよーだい」スッ

北上「ありがとう、おだてて飴を貰う気満々のバレバレだけとおねーちゃん嬉しい

よー」ホレ

シヨタ「ん」パクッ

シヨタ「おいひー」コロコロ

鳥海艦隊

旗艦 鳥海「……………」ボロボロツ 大破

摩耶「ちくしよー、”開幕雷撃”なんて聞いてねーぞつ」ボロボロツ 大破

香取「聞いてなかったではすみません！」

鳥海 摩耶「ー」ビクツ

香取「摩耶さん、貴方は戦場で敵からの不意打ちを受けた時」

香取「聞いてなかったと言いつつおつもりですか？」

香取「それで敵が引いてくれるとでも？」

摩耶「そ、それは……………」

香取「それに、です」

香取「北上さんは、最初こそ軽巡洋艦ですが」

香取「改造後は、重雷装巡洋艦になります」

香取「ましてや、彼女は制服からも分かるとおり、改二」

香取「当然、甲標的を持っていることを考慮すべきでは？」

香取「それともまさか、仲間の装備を理解していなかったなんて言いませんよね？」

香取「敵にも開幕雷撃を行ってくる艦はいますよ？」

香取「それ以外にも、様々な特徴をもった艦はいます」

香取「貴方はそれらに遭ったとき、いちいち資料を捲るんですか？」ニコ
摩耶「」

香取「それから……鳥海さん？」

鳥海「はっ、はい」ビクッ

香取「摩耶さんが攻撃を受けた際」

香取「即座に状況分析を行うのは正解ですが」

香取「考えっぱなしで回避行動もとらずに棒立ち」

香取「それでは格好の獲物です」ヤレヤレ

香取「貴方は『旗艦』であって、ただの『旗』ではないのですよ？」

香取「いえ、的が小さい分、ただの旗の方がまだもったかしら？」

鳥海「」

北上「うわあ」

北上（ボコボコだねえ、香取容赦ないなー）

香取「さて、反省会も終わったところで」

香取「第2戦、行ってみましょうか」ニコッ

摩耶 鳥海（……………鬼だ）

香取 「返事は？」 ニコーツ

摩耶 鳥海 「Yes! マム!」

摩耶 鳥海（違った、鬼教官だった）

（（（

北上艦隊

旗艦 北上「さて、と」

香取艦隊

旗艦 香取「今度は私が旗艦を務めさせていただきます。ふたりとも私の指示をよく

聞いてくださいね？」

摩耶 「分かってるよ」

鳥海 「はい」

北上 「今度は3対1かあ」

香取 「ふふ、スミマセンね。北上さん」

香取 「でも、これくらいで丁度いいハンデ、ですよね？」 ニコ

北上 「いいハンデね」 フー

北上（それは果たして、どちらにとつてのハンデなのかな）

シヨタ「じゃあ、いくよー」

シヨタ「対抗演習、北上艦隊対香取艦隊を行います」

シヨタ「よーい、始めっ」パンッ

《戦闘開始！》

北上「んじゃ、まずは『開幕雷撃』つと」バシユッ　バシユッ

香取「摩耶さん、鳥海さん！」

香取「足下に注意しつつ、ジグザクに前進してください」

香取「いくら酸素魚雷であろうと来ると分かっていたら、ある程度避けられます」ド

ンッ　ドンッ

摩耶　鳥海「了解！」

北上「おっと」スッ　スッ

バシヤン！　バシヤン！（水面に着弾）

北上「っ………」

香取「………」スッ　スッ

北上（足下に集中がいつてるなら、定石どおりで副砲で仕留めればいいんだけど）

北上（香取のこの的確な砲撃支援）

北上（これは、被弾覚悟じやなきや反撃できないな）

摩耶「へっへー」カチャ

鳥海「捉えました」カチャ

北上「……………」

北上（右に摩耶、左に鳥海）

北上（あーあ、挟まれちゃったか）

摩耶「さっきのお返しだ、くらいなっ！」ドンドンッ

鳥海「これで仕留めますっ」ドンドンッ

北上「でも、甘いよっ」ガシヤン

水面「バシヤンッ

摩耶 鳥海「なっ!?!」

摩耶（魚雷と甲標的を捨ててっ）

鳥海（水面を蹴って後退回避したっ!?!）

北上「さてさて、ここで問題です」フワッ

北上「あなたが避けたあと、撃たれた砲弾はどうなるでしょう?」

北上「正解は」

摩耶「ぐあっ」ドカッ チュウハッ!

鳥海 「きやあつ」 ドカッ ショウハツ!

北上 「同士撃ちになる、でした」 ニッ

香取 「……はあ」

香取 「対向射線にいれば、そうなることくらい分かるでしょうに」 アタマカカエ

香取 「……ふたりとも、まだいけますね?」

摩耶 「っ、おうよ!」

鳥海 「はいっ、鳥海いけます!」

香取 「よろしい」

香取 「敵は自身の最大火力である、雷撃を捨てました」

香取 「残る装備は副砲のみ、彼女の右腕の動きにだけ注意していれば、容易く避けられます」

香取 「周囲を旋回して攪乱しつつ、砲撃を続けてください」

香取 「もちろん、味方が射線に入っている場合はどうするか」

香取 「同じ過ちを繰り返さないことを香取は願っていますよ」 ニコッ

くく

シヨタ 「……時間だよ、そこまでっ」

《《戦闘終了!》》

北上艦隊 B勝利

旗艦 北上「うひー、なんとか勝てたわー」 無傷 MVP

香取艦隊

旗艦 香取「おつかれさまでした。ふたりとも動きはよくなりましたよ〃少しだけ

〃
「無傷

鳥海「あ、ありがとう」ボロボロツ 大破

摩耶「ご、ございます」ボロツ 中破

シヨタ「北上おねーちゃん、今回も被弾しなかったねー」

北上「まあね、魚雷を外した時点で、もうS勝利は諦めて」

北上「時間内は逃げまくる作戦に切り替えたからね」

北上（実際、あの後摩耶に一発当てただけだし）

北上（で、鳥海が大破してる原因は……………）

香取「それはそれとして摩耶さあん？」

摩耶「っ」ビクツ

香取「私、言いましたよね？」

香取「〃同じ過ちを繰り返さないことを祈っている」と

香取「なのに、どうして鳥海さんはあんなにぼろぼろなのか」

香取「教えていただけますか？」ゴゴゴツ

摩耶「」

摩耶「ぐすつ」ホロリ

鳥海「摩耶、私が言うのもなんだけれど」

鳥海「どんまい」ポンツ

香取「鳥海さん、他人事のようにおっしゃってますけど」

香取「当たってないだけで、貴方も忠告を守れていませんでしたよ？」

香取「もっと砲撃の腕があれば」、仲間に当たってました」

鳥海「」

鳥海「すんすんつ」ハラハラリ

北上「.....」

北上（香取はああ、言ってるけど。実際は仕方ないのよね）

北上（だって、あたしが〃同士撃ちを誘うような動きをしていた〃んだから）

北上（むしろここは、同士撃ちを恐れず、砲撃出来たことを褒めるべきところなのよ

ね）

北上（どんな理由であれ、戦場なら動けなくなったものから沈んでいくから）

北上「まつ」チラッ

シヨタ「よしよし、おねーちゃんたちは頑張ったよー」ナデナデ

摩耶 鳥海「……………」グスグス

北上「……………」チラ

香取「あらあら、まあまあ」ニコニコ

北上（あたしは、香取のやり方に任せますけどねー）

北上（……………」それにしても）

『香取「……………」スッ スッ』

北上（砲撃支援に集中してるなら、当たると思ってたんだけどなー。魚雷）

北上（最初から香取狙いだっただの、バレてたのかもね）

北上（同士撃ちだって、本当は重巡のふたりに香取を撃たせようとして立ち回ってた

のさ）

北上（あたしが香取の立場だったら、少破ですんだかどうかも怪しいね）

北上（砲撃も、最初の支援以外は撃ってこなかった）

北上（香取が本気できてたら、このB勝利もきつと……………」

香取「はい、それでは摩耶さん、鳥海さん」パンパン

香取「続いて、3戦目。今度は私と行いましょうか」

香取「重巡洋艦2隻が相手ですので、全力のフル装備でいかせていただきますね」ニ

コ

摩耶「」

鳥海「」

〃〃〃

金剛「Hi！北上と提督ジュニア」

シヨタ「あ、金剛だー。金剛ー」ビヨンピヨン

北上「おー」

北上「どーしたの、こんなところまで？ 提督たちは？」

金剛「それが、体よく追い出されましてネー」

金剛「今頃は大佐サンと、HotなTimeを過ごしているはずデース」ヨヨヨ

金剛「なので、私も大佐サンの時雨と工廠で愛の建造w 時雨「あまり引つ付かない

でもらえるかな？」ぎゅむ」

時雨「あの後、君たちの提督と大佐に頼まれてね」

時雨「金剛の開発の手伝いを、さつきまでしてたんだ」

時雨「それと、大佐にも僕にもそんな趣味はないからね」

金剛「ところデ」チラ

摩耶艦隊

旗艦 摩耶「大破 プシユー

鳥海「中破 プシユー

香取艦隊 A勝利

旗艦 香取「ふたりともお疲れさまでした」小破 MVP

金剛「これは一体どういうS i t u a t i o nデース？」クビカシゲ

北上「いやあー」

北上「早く戦力になりたいって言うからさー」

北上「ちよつと遊んであげたんだよ」アハハ

金剛「That's r i g h t! それはいい心がけデース」

摩耶（遊んでたって）

鳥海（こちらは終始全力だったんですけどね……………）トホホ

香取「ふたりとも、最初より随分動きがよくなりましたよ」

香取「摩耶さんは私に3回も攻撃を当てられましたし」

香取「私のフル装備の砲撃を、鳥海さんは中破で耐えました」

香取「その調子で頑張ってください」

金剛「……………北上、鳥海の攻撃はHitしましたか？」

北上「うん。主砲が2発ねー」

金剛「……………香取の言ってるフル装備っていうのは」

北上「うん。香取が改造したときにもってくる装備だよー」

金剛「OK。分かりませタ」

金剛（練度が低くたつて重巡の砲撃を計5発もまともに受けてたら、小破は流石に可笑しいネー……………）

金剛（しかも、香取の言っているフル装備）

金剛（たしか半分は対潜装備だったはずネー）

金剛（……………）

金剛（言わぬがFlowerってやつですネー）

金剛（きつと私がああの立場だったらHeartがますますBrokenしてしまうヨー）トオイメ

金剛「さて」チャプチャプ

金剛「海の上に立つ感覚。んー、とっても久しぶりデース」セノビー

金剛「それじゃあ、私たちもやりましょうカ。時雨」クルッ

金剛「ホンモノの戦いってヤツを見せてあげますヨ。K i t t e n」クイクイツ

シヨタ「そういうえば、ウチの金剛って強いのか？」北上「んー？」につづく

シヨタ「そういえば、ウチの金剛って強いのか？」北上「んー？」

—ヒトゴーマルマル 演習場—

北上「あ、そっか」

北上「シヨタたちは金剛の戦ってるって、見たことないんだっけ」

シヨタ「うん」

シヨタ「昔強かったって聞いたことはあるけど」

シヨタ「今はお父さんの秘書艦ってことしか分からない」

シヨタ「あと、おやつに用意してくれるジュースがおいしい」

北上「つまり、今の金剛のイメージを一言であらわすと？」

シヨタ「おいしいジュースをくれる紅茶オバケ」

北上（子供は素直だなあ）

香取「金剛さん」

香取「もしかして、あの時雨さんと対抗演習するおつもりですか？」

金剛「Of course」

香取「……………」

香取「許可出来ません」

金剛「Oh、香取」

金剛「ここはみんなの演習場、そんなAuthorityは貴方にはありませんヨ？」

ノ
ン
ノ
ン

香取「……………貴方が前線から外された理由、お忘れではないですよね？」

香取「先代の、そして現提督のお心遣いを、無下にするおつもりですか？」

金剛「！」

金剛「そ、それは……………」

時雨「そんなに責めないであげてよ、香取」

時雨「僕がバカにした提督の名誉のために、金剛は戦おうとしてるんだ」チャプ

時雨「艦娘としては、至極当然のことだと僕は思うけど？」

香取「……………」ギリッ

香取「それでも私は」

香取「金剛さんに、戦って欲しくありません」

金剛「……………大丈夫、ネ」

金剛「すぐ決着するヨ」

金剛「だから、お願いネ」

香取「……………」

香取「……………」分かりました」チャップ

香取「それでは練習巡洋艦 香取、この対抗演習にご一緒させていただきます」

金剛「!？」

時雨「……………」へえ」メヲホソメ

時雨「僕は別にいいけど？」

時雨「そうだ」

時雨「ついでにその重雷装巡洋艦さんもどうだい？」

北上「あー、うんとね」

北上「あたしは遠慮しておこうかな」

北上「おふたりさん、参加してきたら」

北上「あのメンツなら、負けても練度はかなり上がると思うよー」

摩耶「……………」馬鹿言うなよ、北上」

鳥海「私も止めておきます。ペイント弾で轟沈はしたくないので」

北上「さいで」

〃〃〃

時雨艦隊

旗艦 時雨「じゃあ、北上。号令は任せたよ」（ストレッチ中）グイグイツ

金剛艦隊

旗艦 金剛「……………」

香取「金剛さん、最初は私が前に出ます。見ていてください」

北上「それではこれより」

北上「時雨艦隊対金剛艦隊で、対抗演習を行います」

北上「始めっ」パン

《戦闘開始！》

香取「練習巡洋艦、香取。参ります」ズサー

香取（多少の被弾は覚悟の上）

香取（全速前進、刺し違える覚悟で正面から突撃いたします！）

ショタ「あ、香取おねーさんが前に出たよ」

北上「そだね」

北上（香取は、金剛が戦闘に参加する前に決着をつけてしまおうという腹づもりみた

いだけど……………）

摩耶「鳥海、どう思う？」

鳥海「どうって……」

摩耶「確かに、あの香取は強いけどさ」

摩耶「あの時雨に勝てるとはとても……」

鳥海「……そうね」

鳥海「香取さんは戦闘経験を積んでいるとはいえ、そのほとんどが対抗演習でしょうね」

鳥海「一方時雨さんは、前線での実践経験が豊富。毎日のように命のやりとりしている」

鳥海「そもそも前提として、ケツコン艦である時雨さんに、香取さんが勝てるとはとても……」

北上「あれ、ひよつとして気がついてなかった？」

北上「香取もケツコン艦だよ」

鳥海「ええっ!？」

鳥海「そんな……私の推測が、瓦解した!？」

摩耶「いや、驚くところそこじゃねーだろ」

摩耶「で、練度は？」

北上「摩耶の改造出来るレベルに+100したよりも、あるかなー」

摩耶「なんつー、遠回しな説明だよ」

摩耶（でも、そうか。ケツコン艦っていうならあの演習での強さも納得できる。それに）

摩耶「なら、ちよつとは勝ち目もあるんじゃないやねえか？」

北上「……そうねー」

北上「どうかねー」

時雨「……」

香取（敵艦に動きはなし……）

香取（罨でもあるの？）

香取（いえ、それでももうこの距離なら）チャキ

香取（確実に当てられる）キツ

時雨「……」ニヤツ サツ

水しぶき「」パシヤ

香取「!？」

香取（水面を薙いで、水飛沫をつ）

香取（けれどこの程度、振り払えるつ）ブンツ

香取「舐めてもらっては困ります。この程度目眩ましにもならん」

時雨「当然、目眩ましになるなんて思ってたないさ。いや」

時雨「香取、君には目眩ましすら不要だよ」スツ

香取「なっ」

香取（いつの間に側面につ!?)

時雨「ただ一瞬、気をそらせれば十分だ」

香取「まゝ」

ドカーンッ

香取「……いつ」タイハッ

香取「金剛、さ、ん」フラッ

香取「だ、め」バシヤンッ

シヨタ「香取おねーさんっ」ダッ

北上「はーいシヨタっち、危ないから近づいちゃだめよー」ガシッ

シヨタ「で、でもっ。香取おねーさんが倒れちゃったんだよ!？」

摩耶「……小口径主砲で中身がペイント弾だとはいえ、土手っ腹にゼロ距離

だからな」

鳥海「私たちの大破のように、被弾しても動けるレベルのダメージではないでしょう

ね」

ショタ「だったら、なおさら助けないと！」

ショタ「このままじゃ、香取おねーさんが溺れちゃうよ」

北上「大丈夫」

北上「信じなさいってば」

時雨「まあ、色々言いたいことはあるけどさ」

時雨「駆逐艦相手に、低速艦の君が開幕突撃は悪手に過ぎるね」クスツ

時雨「頭の良い君らしくもない」

時雨「そんなに冷静さを欠くほど、僕と金剛を戦わせたくなかったのかい？」

時雨「まあ、コンデイションが最高だったとしても、君は僕に勝てなかつただろうけ

どね」

時雨「ケツコン艦？」

時雨「だったら練度100以上ってことだよね？」

時雨「140?150? それとも」

時雨「僕と同じ、165だったりするのかな？」

摩耶「なっ!？」

摩耶「練度165っ!？」

鳥海「嘘ッ、そんなのって」クチモトオサエ

シヨタ「北上おねーちゃん」グイグイッ

シヨタ「それって、凄いの？」

北上「・・・練度99を迎えた艦娘」

北上「本来最上限が99の練度を、引き上げることが出来るシステム」

北上「それがケツコンカツコカリなのは知ってるよね？ シヨタっち」

シヨタ「う、うん」

北上「ケツコンカツコカリが発明された当時」

北上「カツコカリの指輪を身に着けることで、艦娘の練度の上限は150まで引き上

げることができた」

北上「そのカツコカリのシステムは進化を重ね」

北上「15年前に上限155」

北上「3年前に上限160」

北上「去年に上限165」

北上「そしてつい最近、大本営の研究チームが、カツコカリシステムにおける練度の

上限を、175へと引き上げること成功したんだ」

北上「ショタっち、これがどういう意味か分かる？」

ショタ「そ、それって……」

北上「そう、最近になって上限を引き上げなければいけない理由が出来たんだよ」

北上「カツコカリの指輪はただひとつのためだけに、改良されたんだ」

北上「既存の指輪の限界値（最高練度165）に達してしまつた艦娘のためだけにね」

時雨「……」

時雨「そういうことさ」

時雨「まあ、仮に同じ練度だったとして」

時雨「練巡と駆逐艦、対等な勝負になつたかな？」ニヤ

摩耶「……っ」ギリツ

摩耶「鳥海、アタシ今さ」

摩耶「今日イチで悔しいわ」グツ

鳥海「……奇遇ね」

鳥海「私も同じ気持ちよ」ツー

ショタ（鳥海おねーちゃん、下唇から血が出る）

金剛「L o s e r になった時の言い訳作りには、少々演出が f l a s h y 過ぎ
デース。時雨」

時雨「っ（背後から声）」バツ

海面「シーン

時雨（一瞬香取を囿に背後を取る作戦だと思っただけど）

時雨（誰もいなくてよか）

時雨「!?」（水面を蹴り、その場から緊急待避）バシヤ

時雨（浮かんでいた香取は一体どこにっ!?）

時雨（それに、金剛はっ）

時雨（彼女の声は確実に近くから聞こえた）

時雨（だとしたら、今はどこにいるんだっ）キヨロキヨロ

金剛「慌てなくても大丈夫ネ。時雨」

金剛「私は不意打ちなんてしませんカラ」

時雨「っ」バツ

金剛「きっちり正面から戦って教えてあげるヨ」

金剛「駆逐艦風情が戦艦に pick a fight するとうなるかね」スツ

香取「……………」スースー

ショタ「香取おねーさんっ」

金剛「Never mind」

金剛「気絶して、眠ってるだねデス。後で入渠させてあげてください」

金剛「それにしても」

金剛「いつもはお姉さんぶってる香取ですが」フフツ

金剛「寝てる顔はとつても pretty ね」ツンツンツ

時雨（馬鹿、な）

時雨（僕の目を盗んで、この演習場の真ん中から）

時雨（隅の陸地まで、香取を回収して移動したっていうのか）

時雨（あり得るのか、そんなこと）

時雨（……………けれど。そうだとして。なら、金剛のスピードは）

時雨（この僕と同程度ってことだ）ギリッ

時雨「すまなかつたね、金剛」

時雨「僕もやられまいと必死だったんだ」シレッ

金剛「時雨」

金剛 「別に私は、怒ってるわけではありません」

金剛 「これは対抗演習」

金剛 「練習とはいえ、砲雷撃戦なのですかラ」

金剛 「怪我をするのは、仕方のないコト」

金剛 「それでも、もし謝るべきPersonがいるなら」

金剛 「それは私たちのFightに首を突っ込んだ」

金剛 「そこで気持ちよくなるのびている、香取のほうデース」

時雨 「へえ」

時雨 「流石、鬼神の金剛」

時雨 「戦闘については、仲間に対してもストイックなんだね」

金剛 「ノー、ノー、ノー」 チツチツチツ

金剛 「私はこう見えて子供っぽいんデス」

金剛 「つまりね、時雨。こういうことデス」

金剛 「Youが私の砲撃でとおっても痛い思いをしても」 チャキ

時雨 「グッ

金剛 「私は絶対、謝りませんカラッ！」 ドドドドーン!!!

時雨 「ビュン

無数の水柱「ババババ——ンツ!!!

摩耶「つち、金剛の奴いきなりブツ放ちやがった!」ミミオサエ

鳥海(けど、時雨さんはそれを先読みして)

鳥海(着弾予想地点から一息に離脱したわ)

時雨「ザッ

キラッ

時雨「!」バツ

無数の水柱「ババババ——ンツ!!!

大量の水飛沫「パラパラパラパラッ

時雨「………」ボロ

金剛「………」それで避けたつもりになってもらっては困りマース」

金剛「威勢の分くらいは、頑張ってくださいよネ!」ズサー

時雨(防御は間に合った)

時雨(ダメージは爆風をもらっただけ)

時雨(小破すらしてない)

時雨(まだ)グッ

時雨(やれるっ)クワッ

時雨「ビュンツ

バシユツバシユツ ドドドドーン!!! ドンツ！ ドンツ！ ババババーン！ ドー

ンツ！

鳥海「……………」ゴクツ

鳥海（……………早い）

鳥海（目で追うのがやつとだわ）

鳥海（いえ、もしかしたら第三者視点の今でさえ）

鳥海（彼女達ふたりの攻防全てを把握できていないかもしれない）

鳥海（これが歴戦の艦娘の戦い）

摩耶（おいおい、コレが戦艦と駆逐艦の戦いかよつ）

摩耶（実はどつちも島風だつて言われても、アタシは信じちまうかもな）

摩耶（だいたい、駆逐艦の時雨はともかくとして）

摩耶（高速艦とはいえ、金剛のは、戦艦のしていい動きじゃねえぞ）

シヨタ「ほえー」

シヨタ「どつちも早いねえ」

シヨタ「艦娘つてみんな海の上をあんなに早く動けるの？」

北上「全員つてわけじゃないけどね」

北上「鍛えれば、アレに近い動きは出来るかもね」

北上（血反吐を吐くくらいじゃ、無理だろうけど）

ショタ「あれ」

ショタ「でも、時雨おねーちゃんは今一番どの艦娘よりも練度が高いんだよね？」

ショタ「なのはどうして、ケツコンカツコカリもしてない金剛が、そのスピードについていけないの？」

摩耶 鳥海「！」

摩耶「金剛のやつは、ケツコンカツコカリしてなかったのかよっ」

ショタ「？」

ショタ「さっきもだけど、なんで今更驚いてるの？」キョトン

摩耶「あ」

摩耶「ああ！ いや！」

摩耶「そういえばそうだったなって」

摩耶「ちよっと忘れててな」ナハハハ

摩耶（そうだ、確かに金剛は提督とカツコカリをしてなかった）

摩耶（なら、最高でもあいつの練度は99ってことだ）

鳥海（少なくとも、60以上の練度の差）

鳥海（果たしてそれは、艦種の差だけで埋められるものなの？）

北上「……………」

北上「まあ、いろいろ理由はあるんだけどね」

北上「ねえ、シヨタっち。知ってる？」

北上「高速艦と一概に言っても、実はその中でも早さにばらつきがあるんだよ」

北上「一般に、時雨改二の推定速度は36ktって言われてる。一方で金剛改二の推定速度は」

北上「30kt」

北上「時雨改二の実に5／6のスピードしか出せないんだよ」

北上「本来ならね」

北上「それに加えて、今回は練度の差が大きい」

北上「普通に考えれば、時雨がスピードと数の暴力で圧倒して」

北上「時間いっぱいまで袋叩きにされるか、その前に大破して演習終了だ」

北上「けど、そうはなっていない」

北上「その理由のひとつはね、ふたりの装備だよ」

鳥海（装備？）

ショタ「装備がどうしたの？」

北上「まずは、時雨の装備に注目してごらんよ」

北上「主砲1、副砲1、魚雷1」

北上「3つある装備スロット全て使って、攻撃力をバランスよく上げている」

ショタ「………？」

北上「これだけじゃ、まだ分かんないか」

北上「それじゃ、金剛の装備を見てみな」

ショタ「金剛の………」

ショタ「？」

ショタ「！」

ショタ「金剛、大砲いっこしか装備してない」

摩耶 鳥海「!？」

北上「そっ」

北上「金剛は、装備スロットが4つあるにもかかわらず」

北上「装備しているのは大口徑主砲ひとつのみ」

北上「しかも比較的、精度のつけやすい30.5cm三連装砲をね」

北上「推定速度っていうのは、その艦娘に初期装備を持たせた時の速度なわけ」

北上「時雨は初期装備より、ひとつ装備が多くて」

北上「金剛は初期装備より、ふたつも装備が少ない」

北上「なんていったって馬力は高速戦艦が勝ってるからね」

北上「それだけでも、差が埋まる気がするでしょ？」

摩耶「なら、時雨も装備を外して身軽になれば・・・」

北上「速度の優位はある程度取り戻せるだろうね、けど」

鳥海「ただでさえ戦艦を相手にするには物足りない火力を、更に落とすことになってしまう」

鳥海「決定打を与えられなければ、勝てないし」

鳥海「時間いっぱい使って粘り勝ちを狙おうにも、万が一、その間に大きなダメージを受

けてしまえば」

鳥海「形勢を覆すことは致命的、ということですね」

北上「そーいうことだねー」

北上「そして、もうひとつ」

北上「ふたりの戦力差を埋めている要因は」

北上「経験の差だよ」

ショタ「え」

ショタ「でも時雨おねーちゃんのが練度は高いんでしょ?」

ショタ「それって、経験値が金剛よりいっぱいってことでしょ?」

摩耶「アタシも、ショタと同じ意見だ」

摩耶「いくら金剛が実戦経験を積んでいるっていつても」

摩耶「それはケツコンカリ制度が出来る以前の話だ」

摩耶「それに、練度165の時雨が」

摩耶「金剛に経験の差で押されてるってのは、どうも納得できねえ」

北上「……………鳥海もそう思う?」

鳥海「私は……………」

鳥海「北上さんの説には一理あると思います」

摩耶「あん? なんでだよ、鳥海」

鳥海「北上さんがおっしゃっているのはきつと、量の話ではなく」

鳥海「質」の話だよと思うわ」

シヨタ 摩耶「量？ 質？ 何のこと（だ）？」

北上 鳥海（脳みその中身が同レベル……）

鳥海「こほん」

鳥海「つまり、〃どれだけ経験しているか〃ではなく」

鳥海「〃1度でも経験したことがあるか〃ってことよ」

鳥海「そうですね、北上さん？」

北上「ご名答——」

北上「いやー、流石鳥海。高雄型の頭脳ポジションなことはあるね」パチパチパチパ

チ

鳥海「ふふ、一応褒め言葉として受け取っておきますよ」

北上「じゃあ、シヨタっちと高雄型のポンコツ担当にも分かるようにこのハイパー北

上様が説明してあげるとだね」

シヨタ「うんうん」

摩耶「誰がポンコツ担当だよ」

北上「金剛は〃自分と同じか少し素早くて、火力が自分より劣っている相手〃、つま

りあの時雨と同じような相手と何度も戦ったことがあるんだよ。けど」

北上「〃自分と同じか少し素早さが劣っているけれど、火力が自分より遥かに上回っ

ている相手”、まさしく今対峙している金剛のような相手と、戦ったことはあるのかって話だ」

摩耶「速度が駆逐並みの戦艦”と”速度が戦艦並みの駆逐艦”」

摩耶「遭遇したくねえのは、どっちかって話か」ナルホド

北上「んー、ちよつと違う気がするけど大体そんな感じー」

鳥海（戦い方を熟知しているタイプの戦艦と）

鳥海（初めて戦うようなタイプの戦艦）

鳥海（その違いもまた、あのふたりの拮抗を演出している）

鳥海（それは、確かに分かるのだけれど）チラッ

北上「……………」

鳥海（本当に、要因はそのふたつだけなのかしら）

時雨「シューーーーーー」（艦装で水面をすべる音）

金剛「Hi, Kitty!」クルッ

金剛「私の周りをぐるぐるしてるだけでは、私には勝てませんヨ」ドドドーン

時雨「……………」シューン シューン

無数の水柱「ババババ————ンッ!!!

金剛（身体を翻しての、動きを最低限にした紙一重の回避）

金剛（よほど自分に自身を持ってなきやImpossibleな動きネ）

金剛（これでは、バランスを崩させて隙を作るのは無理そうですね）ドンツドンツ

時雨「……………つう」ヒュン ヒュン

無数の水柱「ババババ——ンツ!!!

時雨「……………はっ」バシユツ ドンツドンツ

金剛「……………」クルツ

金剛「……………Very easy」スツ スツ

水柱「パンツパンツ

時雨「……………」チツ

時雨（いくら背後に回っても、僕の砲雷撃に対応してくる）

時雨（なるほど）

時雨（僕程度のスピードの敵とは、目が慣れるほど交戦したことがあるってわけか）

時雨（互いの戦闘でのダメージは、最初に僕が受けたものだけ）

時雨（このまま逃げていても、僕の負け。だね）

時雨（……………そろそろかな）ズサア——

時雨「……………」ピタツ

金剛「……………」ピクツ

金剛（……………動きを止めた。Give upですか? 時雨）ピタリ

金剛（いえ、アレは……………）

時雨「ギロツ

金剛（なるほど）ニヤツ

金剛「決着をつける気ですネ、時雨」スチャツ

ショタ「ふたりとも、止まったよ」

北上「そろそろ時間だからね」チラツ

北上「これが最後の駆け引きになるよ」

時雨「……………」ハアハアハア

時雨「……………世界は、広いね」ハアハアハア

時雨「そして、狭くもある」フウ

時雨「どの鎮守府の島風にも追いつかれない自信があつたのに」

時雨「まさか僕のスピードに到着してこれる戦艦と、こんなところであうだなんてさ」

時雨「……………」

時雨「・・・・・・・・行くよ、金剛」チャキツ

金剛「・・・・・・・・」

時雨「・・・・・・・・」

時雨「行つてっ！」バシユ

金剛（魚雷、正面から一発）

金剛（しかも弾道が透けるほど、浅い）

時雨「サーツ

金剛（そして自分は魚雷を追うようにして、主砲を構えたまま距離をつめる）

金剛（・・・・・・・・）

金剛（魚雷は明らかなブラフ）

金剛（回避行動をとろうとした瞬間に、威嚇砲撃をして）

金剛（怯んだところに全弾を叩き込む）

金剛（そう言う腹づもりデスカ）

金剛（なら）

金剛（この魚雷を受けてる！）スチャ

時雨「っ」

時雨（退避しない!?!）

時雨（そうかつ）

金剛（貴方の貧弱な砲撃ごと、粉碎してあげマース!）

金剛「コレでFinish!」

金剛「Burning ラ・・」

時雨「やっぱりそう来ると思ってたよ、金剛っ!」ドンツ

金剛「What!?!」

金剛（まだ私は時雨の主砲の射程にはギリギリ入っていないハズ）

金剛（では、彼女は何を・・・・ハツ

金剛（まさかつ!）

巨大な水柱「バ——ンツ!!!!

金剛（I can't believe it!）

金剛（“自分の放った魚雷を撃ち抜いての目眩まし” デースっ!?!）

金剛（そんなの初めて聞きましたヨ!）

金剛（時雨は・・・・right?）チラッ

金剛（それとも、Left?）チラッ

金剛（……）

金剛（いえ、どちらもNo!）フツ

金剛「答えはBackネ!」

金剛（ギリギリまで距離を詰めず）

金剛（早い段階で魚雷を爆発させたのは）

金剛（爆発に注意を惹きつけ）

金剛（自分から視線途切れさせるためデス!）

金剛（加えて、それなら姿を左右どちらから現すのに）

金剛（時間が掛かると思わせるコトも出来る）

金剛「最後まで私の背後を取ろうとするStrategyを変えなかった時雨、貴方の「クルツ

時雨「そう」

時雨「僕の勝ちだっ!」バシャンツ

金剛「Front!?!」

金剛（最後の最後で、水柱の中を突っ切つての正面突破デスカっ!?!）

時雨（そう、最初から僕の作戦は変わってない）

時雨（この正面からの突撃を成功させるための）

時雨（あの執拗な背後からの攻撃だったのさつ）

時雨（頼むよ）スチャ

金剛（まづいつ。懐に入られマシタつ）

金剛（主砲の照準はもう間に合わない）

金剛（かくなる上は・・・）グググツ

北上「金剛つ!!!!」

金剛「つ」トスツ

時雨「全弾、発射」カチツ

ババババババ——ンツ

!!!!!!!

摩耶「どうなったんだっ!？」

水蒸気「」ブシャァー

摩耶「くそつ、巻き上がった水飛沫でよく見えねえ」

鳥海 「今の攻防で制限時間よ」

鳥海 「最後攻撃を回避出来ていれば、金剛の勝ち」

鳥海 「逆に、小破以上のダメージを負っていれば時雨さんの……ですけれど」
鳥海 （この勝負はきつと……）

サーツ

シヨタ （水蒸気が引いて）

シヨタ （視界が回復していく）

金剛 「……」

時雨 「……」

金剛 「……」

時雨 「……」

金剛 「……」

時雨 「……」

時雨 「……くっ」フラッ

時雨 「カタヒザツキ

金剛 「……やりましたネ」

金剛 「Winnerは」フツ

「金剛「貴方です、時雨」ツーツ

北上「……」

北上「戦闘終了、だよ」

《戦闘終了!》

時雨艦隊 A勝利

旗艦 時雨「……」被害軽微 MVP

金剛艦隊

旗艦 金剛「……」Lose」ボロボロ 中破

香取「ボロボロ 大破

金剛「負けてしまったんでデスね私は」

摩耶「金剛!」ダッ

鳥海「金剛さんっ!」ダッ

ショタ「金剛」

ショタ（口許から血が垂れてる）

ショタ（それに、服も、偽装も）

シヨタ（ボロボロだ）

金剛「ごふっ」ゲホゲホッ

金剛「バシヤンッ

金剛（本気でやりあつて負けるのなんていつ以来でシヨウ）

金剛（しかも相手は駆逐艦）

金剛（・・・・・・）

金剛（悔しい）

金剛（悔しい、ハズなんですケド・・・・・・）

夕日「キラキラ

金剛「Oh、雲ひとつない、真つ青なSkyデース」

金剛（久しぶりにまじまじと見た空）

金剛（・・・・・・綺麗すぎて、眩しすぎて）メモトオサエ

金剛「直視、出来ナイネー。ハハッ」グスッ

時雨「・・・・・・」

時雨「・・・・・・」クルッ

時雨「・・・・・・すまなかつたね、金剛」

時雨「戦つて欲しかったとはいえ、君の上官を辱めるようなことを言ってしまった」

時雨「今更かもしれないけれど、訂正するよ」

時雨「こんなに素晴らしい艦娘に慕われ、尊敬されている君の提督は」

時雨「とても、偉大な人間だとね」スツ

／＼コンゴーツ コンゴウサンツ シツカリシテクダサイ オイツ コンゴウツテバ

時雨「・・・・・・・・」パシヤ パシヤ

時雨「・・・・・・・・」ポタポタ

時雨「・・・・・・・・」テクテク

北上「お疲れ」

北上「時雨」

時雨「・・・・・・・・」ピタツ

時雨「・・・・・・・・君も金剛のところに行つてあげるといい」

時雨「練度が遥かの相手に」

時雨「久々の実践で、あれだけの勝負をしたんだから」

北上「そりゃ、金剛も凄かったけどね」

北上「あんたも凄いよ」

北上「さつきも、今も」

時雨「……………素直に受け取っておくよ」フツ

時雨「じゃあ、僕は失礼するね」

北上「時雨」

北上「お風呂（入渠ドック）、準備出来てるから」

北上「落ち着いたら、入りにいきな」

北上「じゃあ、また後で」ヒラヒラ

時雨「……………ありがとう、恩に着るよ」

時雨「さつきも、今もね」テクテク

シヨタ「ねえ、北上」テトテト

シヨタ「今、時雨になんて耳打ちしてたの？」

北上「んー？ 別にー」

北上「くだらないコトについてだよ」

シヨタ「くだらないこと？」

北上「そつ」

北上（女のプライドっていう、くだらなくて、ちっぽけなモノの話よ）

―ヒトゴーサンマル 工廠裏―

時雨「……………」

時雨「このあたりで、大丈夫かな」

時雨「うっ」カベニヨリカカリ

オエエエエーエツ ビチャビチャ

時雨「ハアハア

時雨（・・・あの時）

『北上「金剛っ!!!」

金剛「っ」トスッ』

時雨（最後に腹部に触れた、金剛の拳）

時雨（北上の声がなければ僕は・・・）サスッ

時雨「うっ、っう」ズキッ

時雨（寸前で威力を抑えてこのダメージ）

時雨（『外側』は無事でも、『内側』はぐちゃぐちゃだ）

時雨（しかも、僕のゼロ距離の砲雷撃を受けて中破）

時雨（ケツコン艦の武蔵すら大破にしたっていうのにさ・・・）シャガミ

時雨「ほんと、・・・この世界は、イヤになる、よ」カクッ

時雨「」

時雨「」スウスウ

ザッ

大佐「・・・・・・・・」

大佐「・・・・・・・・ご苦勞だったな、時雨」ダキアゲ

大佐「それでこそ、私の秘書艦であり初期艦だ」

大佐「練度も、ひとつ上がったか」

大佐（最近は練度をひとつ上げるのにも、数ヶ月は掛かっていたのだがな）

大佐（それにしても、あの金剛）

大佐（本当に、〃艤装がない方が強い〃とは）フツ

大佐「・・・・・・・・だからこそ。惜しいな、実に」

ザッザッザッ

《對抗演習 成果》

摩耶 練度5↓練度17

鳥海 練度5↓練度18

北上 練度117↓練度120

香取 練度140↓練度141

金剛 練度上昇なし

時雨 練度165↓練度166

提督「フタフタマルマル、君達が司令室に呼ばれた理由は分かるか?」
につづく

《おまけ挿絵 時雨と大佐の11月11日》

提督「フタフタマルマル、君達が司令室に呼ばれた理由は分かるか？」

—フタフタマルマル 司令室—

提督「答えられるものは挙手したまえ」

金剛「えへへ〜」（入渠済み、高速修復材投入）

摩耶「ええと」（疲労抜きのため、1時間の入渠済み）

鳥海「……………はぁ」（疲労抜きのため、1時間入渠済み）

香取「……………」（入渠済み、高速修復材投入）

北上「んー？」（疲労抜きのため、1時間の入渠済み）

金剛「テートクウー」ダキッ

金剛「怒つちやNoだヨー」スリスリスリスリッ

摩耶（金剛が提督に抱きついて）

鳥海（顔に胸を押し当てて）

香取（頭に頬ずり・・・）

北上（シヨタつちが居なくて良かったねー）

提督「・・・・・・・・」

提督「まずは、摩耶、鳥海」

摩耶「お、おう（そのまましゃべりだすのか・・・・・・・・）」

鳥海「は、はい（なんだか凄い絵面ですね・・・・・・・・）」

提督「私は、今日は休めと言ったはずだ」

提督「なのにどうして、演習場に？」

北上「あー、それはさ。提督」

北上「あたしが誘ったんだよ」

北上「なんでも、すぐにこの鎮守府の戦力になりたいらしくてさ」ニヤリ

提督「・・・・・・・・ほう」

提督「なるほどな」

摩耶 鳥海「」ビクッ

摩耶 鳥海（お、悪寒が・・・・・・・・）ブルッ

提督「では続いて、北上」

北上「はいはい、北上さんです」キョシユ

提督「演習中に甲標的と魚雷装備を着脱して」

提督「海中に落としたそうだな」

摩耶（あ、やつぱりあれって）

鳥海（やつちやダメなんだ）

北上「ちゃんと回収はしたよー？」

提督「潮風や海水の飛沫ですら」

提督「小まめな整備の必要な」

提督「ただでさえ繊細な艤装を」

提督「海水漬けにして」

提督「回収しただけで、まともに使えると思っっているのか？」

北上「……………」

北上「……………てへ☆」ペロツ

提督「……………よし」

提督「可愛いから、許そう」

摩耶 鳥海「ええっ!?!」ガビーン

提督「とでも、言うと思っただかつ」クワッ

北上「ええっ!?!」ガビーン

香取「……………当たり前でしょう」ハァー

金剛「むしろ何でそれで許されると思ったですカ……………」ヤレヤレ

摩耶 鳥海（それをあんた（あなた）が言うの（言うんです）か……………）

提督「それを君が言うのか、金剛」

金剛「Oh！ ナイスツツコミ！ 提督！」ギユ

提督（息が、苦しい……………）ムゴツ

香取「……………」

香取「……………提督、私は」

提督「香取」

提督「私は、練巡としての君の仕事を十二分に評価している」

提督「だが、今回のような無茶なマネは今後控えてくれ」

提督「いいね？」

香取「練習巡洋艦の私では、いくら練度を上げたところで駆逐艦にすら勝てない？」

香取「演習と練習遠洋航海の監督だけこなしていれば良いと、そうおっしゃりたいんですか？」

提督「香取、君は我が鎮守府の貴重な戦力だ」

提督「時が来れば、君にもまた戦場で戦ってもらうことになる」

提督 「だから今は、今君に課せられた任務に全力を傾けて欲しい」

提督 「私の期待に応えようとしてくれるのなら」

提督 「自らの使命に支障をきたすような行動は慎んでくれ」

香取 「・・・分かりました」

提督 「ありがとう、香取」

提督 「さて」

提督 「各々、自分の犯した過ちは重々理解していると思う」

提督 「私としては、反省し、同じ失敗を繰り返さないように努めてくれればそれだ

けで十分なのだが・・・」

提督 「それでは他の者に示しがつかないというのも、また事実」

提督 「そこで、だ」

提督 「摩耶、鳥海、北上、香取」

提督 「君達には明日、例の輸送任務を行ってもらおう」

金剛 「Oh」

香取 「それはなんとまあ」

北上「思い切ったねー」

摩耶「それってあれかい、最初に言ってたやつかい？」

提督「ああ、そうだ」

提督「明日、急に輸送艦隊を派遣することになったんだが」

提督「遠征中の艦隊が帰港するのが、一番早いもので明日の明け方だね」

提督「毎日の激務に愚痴ひとつこぼさず働いてくれている彼女たちに」

提督「急遽、徹夜での遠征を命令するのは心が痛い」

提督「そこで、今この鎮守府で唯一手の空いている君達に、この輸送任務を行ってもらおうと思う」

提督「本当なら摩耶と鳥海には、改造を済ませてから、駆逐艦たちと一緒にひとりずつ行う予定だったが」

提督「このメンツなら、その練度でも問題ないはずだ」

提督「彼女達の実力は、対抗演習で身をもって知っているだろう？」

提督「それとも、不安かね？」

鳥海「ええ、それは……」

鳥海（むしろ、この2人を遠征の補佐につけてくれるのは、少々戦力過多な気もしますけれどね……）

鳥海「了解しました」

鳥海「その任務、謹んでお引き受けいたします」

提督「摩耶」

摩耶「もちろんだつ。輸送任務くらい簡単にこなしてやるよつ」

提督「そう言ってくれると思っていた」

提督「では、餞別だ」

提督「明日はこれを必ず装備して、任務にあたってくれたまえ」コトツ

応急修理女神×2「キラキラキラキラ

摩耶「」

鳥海「」

摩耶 鳥海（ダメコン積むぐらい危険な輸送任務なんて聞いたときねえぞっ!?（ないわっ!?!））

北上「もー提督」

北上「冗談キツイよ? もう」プンスカ

香取「そうですよ」

香取「それで彼女たちに輸送任務につけと？」ヤレヤレ

提督「……冗談だ」

摩耶 鳥海「……」ホッ

摩耶（そ、そうだよな）

鳥海（そうよね、本当はドラム缶かなにかと間違えたのよね。私たちには積めないけど）

提督「ちゃんともう1セット用意してある」コトツ

応急修理女神×2「キラキラキラキラ

応急修理女神×2「キラキラキラキラ

摩耶「」

鳥海「」

提督「それでは改めて、任務の詳細を伝える」

提督「遠征名、物資輸送船団護衛任務」

提督「輸送船団を敵から護衛し、無事、物資支援を完遂せよ」

提督「期間は4日、目標海域は」

提督「深海中枢海域」

提督「敵の腹中だ」ニツ

―フタフタサンマル 鎮守府廊下―

摩耶「上級ダメコン2個積みとか、どんな遠征任務だよっ！」クワツ

鳥海「確かに資料には記述がありましたか……ジョークのたぐいではなかったのですね」

北上「ウチのお堅い提督さまが、冗談なんて言えるわけないじゃーん」ケラケラ

香取「北上さん、上官に向かってその言い方はどうかと」

香取「さて、皆さん。明日は早いですので今日はしっかりと休息を取ってくださいね」

香取「それでは、私はこれで」

香取「お休みなさい」ペコリ

北上「おやすみー」

摩耶「おう」

鳥海「お休みなさい」

北上「んじゃ、あたしも部屋に戻らせてもらおうねー」バイバイ

鳥海「はい、お休みなさい」

鳥海「……私たちも部屋に戻りましょうか」

摩耶「そうだな」

鳥海「……………」テクテク

摩耶「……………」トコトコ

摩耶「にしても最後、まさか提督があんな大胆発言するとはなあ」

鳥海「青葉さんがいたら、明日の鎮守府は大騒ぎでしたでしょうね」

—以下回想—

提督「では解散」

「「「はーい」」」

金剛「じゃあ提督、Good Night! いい夜w」

提督「待て」ガシツ

提督「君は残れ、金剛」

「「「!!」」」

金剛「て、提督—」

金剛「お説教なら今受けたばかりネー」ビクビク

提督「説教と言うなら、そうだな」

提督「だが、他のものには与えた処罰を君にはまだ下していない」

提督「私に演習とはいえ、禁止していた艦装の展開および戦闘行為」

提督 「ついでに、予定になかった高速修復材の分もキツチリ勘定にいられてやろう」

金剛 「じゃあ今日はもう遅いし、明日の Morning に聞かせてもらいま」

提督 「いや、もう処罰は決めてある」

提督 「このまま、隣の部屋に来なさい」

金剛 「隣って………応接室、ですか？」

提督 「金剛、秘書艦の君がこの司令室の構造を知らないわけがないだろう？」

提督 「当然、もうひとつの方の部屋だ」

提督 「私の私室だよ」

「「「「!?!?」」」」

金剛 「」

金剛 「／／／」ポッ

金剛 「分かったヨー、提督」

金剛 「………」

金剛 「Hey、提督う」

金剛 「時間と場所は大丈夫だけどサ」

金剛「G e n t l yに触ってくださいネ」ウワメズカイ

提督「もちろんだとも」

提督「だが、君の方は我慢しなくていい」

提督「私と君の仲だ。今更遠慮はするなよ」

提督「今日は朝まで、付き合ってやる」

「「「「」」」」

提督「そういうわけだ、金剛以外の諸君」

提督「いい夜を」

——回想終了——

摩耶「あの提督にあんな甲斐性が……」

鳥海「摩耶、変な詮索はよしなさい」

摩耶「でも、そういうことだろ」

摩耶「この鎮守府には自分の息子も一緒にすんでるつてのに」

鳥海「……摩耶」

摩耶「でも、しゃーないか。女所帯の鎮守府で提督も色々大変だろうし」

摩耶「それに、奥さんだって m 鳥海「摩耶っ」

摩耶「……悪い」

摩耶「無神経な発言だった」

鳥海「謝るなら、最初から口にするものじゃないわ」

鳥海「それに、謝る相手も間違ってる」

摩耶「……………」

鳥海「……………」私たちも早く寝ましょう」

鳥海「明日の任務のことだけ、考えながらね」

―フタフタサンゴ― 艦娘寮―

北上「ただいま」ヒソヒソツ

北上（部屋の電気は、と）パチツ

ペカツ

シヨタ「……………」ピク

シヨタ「うゝん」ミケンニシワヨセ

シヨタ「……………」

シヨタ「くかー」zzz

北上「ベッドで寝てても忙しそうだねー」ギシツ

北上「ただいま、シヨタっち」ナデナデ

シヨタ「……………」zzz

北上「おーおー、ぐっすり寝てらっしやる」

北上「君のお父さんと金剛は今頃お楽しみだつてのに」

北上「気楽なもんですねー」

机の上「」カタツ

北上「・・・」チラッ

北上「うそうそ」

北上「怒らないでよ」

北上「心配しなくてもとらないつてば」

北上「あたしも金剛も」

北上「・・・」

北上「弁えてるよ」

北上「彼とアタシたちじゃ」

北上「生きる時間が違うつてさ」スツ

写真立て「」

シヨタ「・・・」

―フタフタヨンマル― 提督私室―

提督「」コンコン

提督「入っても大丈夫か？」

『OKデース』

提督「ガチャ

ベッド上のパジヤマ金剛「どう、ですか？」

金剛「似合ってます、カ？」ウルツ

提督「……………」

提督「ああ」

金剛「“ああ”、じゃ分からないヨ」

提督「可愛いよ、金剛」

提督「やっぱり金剛は、白が一番似合う」

金剛「えへへ」

提督「あ」

提督「でも、建造された年数〓年齢と考えると“可愛い”って歳じゃn」ポフツ

枕「パサッ

金剛「その話はタブーって」

金剛「そう、言っただけヨ？」プクウ

提督（とはいえ、顔面にマクラを投げつけてくるのは）

提督（如何なものだろうか）

提督「悪かったよ」マクラヒロイアゲ

提督「金剛」スタスタツ ポフツ

金剛「あつちに行つてくだサイ」

金剛「私は隣に座つていいなんて言つてませーん」

提督「ここは私の部屋なんだがな」ポリポリ

提督「ほら」スツ

提督「来なさい」ポンポンツ

金剛「・・・・・・・・」

金剛「・・・・・・・・」ストンツ

提督（不機嫌で悪態をついていても）

提督（言われるままに私の開いた足の間に座つてくる金剛）

提督（なんやかんや物分かりのいい、素直ないい奴だ）

提督（いや、今日はもうそんな元気がないだけか）

提督「懐かしいな」

金剛「What? なにがデス？」クテ

提督（「見上げるフリして、寄つ掛かるなよ。重い」）

提督（なんて言ったら、また怒られるんだろうな）

提督「いや」

提督「こうやってひつついてるのがさ」

金剛「いつも一緒にいるじゃないですか」

提督「じゃなくてね」

提督「昔は何にも考えずに」

提督「四六時中一緒に居たなってさ」

金剛「一体、どれだけ昔の話をしてるデース？ 提督」

提督「そーだなあ」

提督「私が……俺が、提督になるずっと前」

提督「„提督”じゃなくて、„You”って君に呼ばれてた頃のことかな」

金剛「……」

提督「どうした、何か言ってくれ金剛」

提督「無視は流石に傷ついてしまうな」

金剛「……今日の提督はイジワル、デス」

提督「君には困らされてばかりだからな」

提督「しおらしい今のうちに、日頃のお返しをしようと思つてね」

提督 「こんな時でもない、返り討ちにされるし」

金剛 「なんですか、そr」

ズキッ

金剛 「あう」

提督 「……痛むのか？ 金剛」

提督 「沈痛薬は？」

金剛 「もう、飲んでマス」ズキズキッ

提督 「そうか」

金剛 「……提督」

提督 「ん？」

金剛 「ギユッとしてもらっても、よいデスカ？」

提督 「ん」ギユッ

金剛 「へへっ」

金剛 「やっぱり…… You は温かいネ／／」ギユッ

金剛 「……」

金剛 「ごめんネ、約束破ってしまったテ」

提督 「いや、謝罪するのは私の方だ」

提督「君がこうして苦しむのが分かっていたのに」

提督「積極的に止めに入ろうとしなかった」

提督「君を本当に思うのなら止めるべきだったのに」

金剛「知ってたんですカ？」

金剛「もしかして、最初カラ？」

提督「………」コクツ

金剛「じゃあどうして私が、時雨とFightしたのカモ？」

提督「………」コクツ

提督「大佐が時雨に入れ知恵したと、そう言っていた」

金剛「デスカ」

提督「………」

金剛「………」なら」

金剛「私の活躍、見ててくれたってことだよネ？」

提督「金剛」

金剛「どうでシタ？ 私」

金剛「Youの艦娘として、恥ずかしくない姿、見せることができましたカ？」

提督「もちろん」

提督「格好良かったよ」

提督（恥ずかしいなんて、あるわけないじゃないか）

提督（私のために無理を押しして戦ってくれる君が）

提督（それに）

提督「君を止めなかったのは」

提督「君の戦う姿を、ちゃんとこの目に焼き付けておきたかったからだ」

提督「全艦娘で最高練度を誇るあの時雨と、対等以上に戦った」

提督「君は自慢の、私の秘書艦だよ」ギユツ

金剛「……うん」

金剛「褒めてくれて、Thank Youネ」

金剛「とつてもとつても、Thank Youネ」ギユツ

提督（……）

提督（私が金剛に戦闘を許可していないのには、理由がある）

提督（同時にそれは、練度で遙かに劣る時雨と渡り合えた理由でもある）

提督（「彼女は、リミッターが壊れているのだ」）

提督（本来なら、身体の限界を察知して作動する生命に対する安全装置）

提督（それが作動しないが故に、金剛は艦娘ですら本来体現出来るはずのない、秘められた身体能力を、発揮できる）

提督（だが反面、不相応な力の代償として、身体にも計り知れない負荷をもたらす）

金剛「……………っ……………うぐっ」ズキズキツ

提督「……………」サスサス

提督（金剛が戦闘を行った『反動』は、こうして夜に現れる）

提督（細胞が消耗を回復させようと、競うようにうごめいて）

提督（擦れ合い、熱を帯びる）

提督（自分の細胞ひとつひとつが、入り乱れ、混ざり合っていく感覚）

提督（加えて、人間では、生命を維持できないほどの発熱）

金剛「……」ハアハア

提督（いくら艦娘であっても、平然としていられるわけがない）

提督（だからといって、私が金剛にしてあげられることとまったく違う）

提督（戦闘のあつた夜に、こうやって一緒にいて）

提督（背中をさすって、こわばる身体を抱きしめてやることくらいだ）

提督「……………無力だな、私は」

金剛 「無力なんかじゃないよ」

金剛 「Youが居てくれるから、戦える」

金剛 「Youが待つてくれるから、頑張れる」

金剛 「私はずっとそうでした」

金剛 「他の艦娘だつてそうだよ？」

提督 「だがっ、私はっ」

提督 「私はこれまで多くの艦娘を酷使し」

提督 「最期は2度と帰れる死地に、有無を言わさず送りこんできた」

提督 「それに、そもそも君のその発作は……」

金剛 「Stop」

金剛 「Youの悲しむ姿を見てたら、私ももっと辛くなつてしまいますカラ」

金剛 「だから、私のためにこれ以上自分を責めるのは止めてください」

金剛 「ネ？」 ナデナデッ

提督 「……」

提督 「私は、されるがままに、彼女に撫でられていた」

提督 「本来なら、男女で立場が逆なんだろうが」

提督 「この私と金剛の立場は、子供の頃からまったく変わっていない」

提督（……………）

提督（金剛は、最初からリミッターが外れていたわけではない）

提督（20年以上前、カッコカリ制度がまだなかった頃）

提督（前提督の時にいちど、この鎮守府は深海棲艦による大規模な襲撃を受けた）

提督（その際、敵の爆撃で傷ついた私を目にした瞬間から）

提督（彼女はこんな「鬼神」と化したんだ）

金剛「……………」ナデナデ

金剛「少しは、落ち着きましたか？」ナデナデ

提督「すまない」ゴシゴシッ

提督「これではどっちが、介抱してるのか分からないな」ズピー

金剛「No problem 私はいつまでもYourのOlder sisterで

すカラネ」

金剛「Youはもつともつと、この金剛に頼っていいんですヨ？」

金剛「そうそう、遠慮は良くないネ」

金剛「こうして、Youを甘やかしてあげられるChanceも」

金剛「もう、あんまりないんですカラ」

提督「……………」

提督「今日はもう、休もう」

提督「消灯するぞ」

金剛「Morningまで、付き合ってくれるんじゃないかなかったですか？」

提督「添い寝してやるという意味だ」

カチツ

金剛「1度くらい、抱いてくれてもいいのに……」ボソツ

提督「今だって、抱きしめてあげてるじゃないか」

提督「疲れただろう。眠れそうか？」

金剛「……Yes」

金剛「誰かさんが私の代わりにTearを流してくれましたからね」ギユツ

提督「そうか」

提督「どんな形であれ、君の役に立てたのなら良かった」

提督「お休み、金剛」

金剛「Good night」

金剛「提督」

金剛（こうして、大好きな人の腕の中で眠りにつくことが出来る）

金剛（心が満たされ、いつ朽ちても悔いはないと思えるくらいには）

金剛（私は、幸せな艦娘デシタ）

『あの人のとあの子の人生を、これからも側で見守っていけたら。そう、思います』

金剛（望みを叶えられず一生を終えるものもいれば）

『あたしはさ、＼あの子＼の代わりじゃない。あたしはあたし。似てるのは器だけだよ』

金剛（最初から、その在り方を望まれないものもいる）

金剛（・・・けど）

『おねーちゃんっ』

金剛（北上）

金剛（貴方は最期に、誰に何を残すのでしょうか）

―球磨型 3番艦 重雷装巡洋艦 北上 抜錨まであと16日―

鹿島「お待ちかね、みんな大好き鹿島の登場ですっ☆ うふふ♪」につづく